

ナゴヴィシ・シベ語の類別詞

稲垣 和也

キーワード：ナゴヴィシ・シベ語，パプア諸語，類別詞，形態法，多重類別型言語

1 はじめに

1.1 言語の概要

本論文は、パプア・ニューギニアのブーゲンヴィル南部で話されているナゴヴィシ・シベ語の類別詞について記述することを目的とする。ナゴヴィシ・シベ語には十分な記述が無く、本論文で提示するデータは、2009年8月の筆者の現地調査に基づく^{注1}。

本論文が対象とするナゴヴィシ・シベ語は、エスノログ (Lewis 2009) によると、「シベ語」と呼ばれている。その別名としては、(i) ナゴヴィシ語、(ii) シッベ語、(iii) シベ・ナゴヴィシ語などがあげられている。この中で、特に、ブーゲンヴィル研究で著名なダグラス・オリバーの言及もあって (Oliver 1973, 1991)^{注2}、ナゴヴィシという呼称はよく知られている。現地社会の中での使用を観察すると、ナゴヴィシの人々によって話されている言語を指すために、「シベ (Sibe)」という呼称が広く知られている。本論文では、(a) 現地社会での使用、(b) エスノログの使用、(c) ブーゲンヴィルの先行研究での使用を考慮し、「ナゴヴィシ・シベ語」という表現を用いることにする。

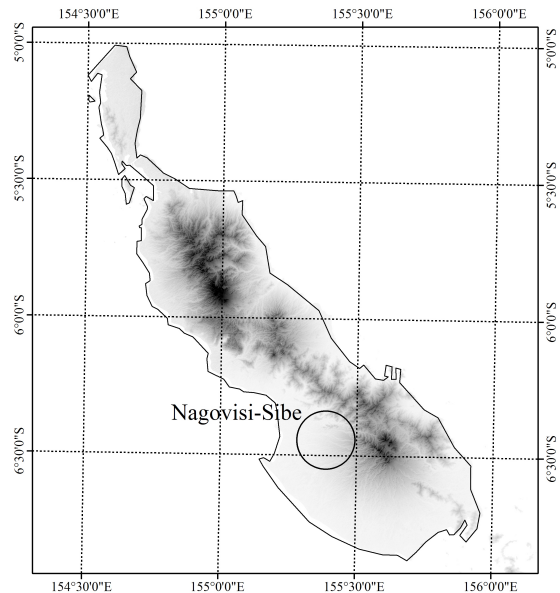


図1 ブーゲンヴィル

^{注1} 筆者による言語調査とは、(i) ソロモン諸島北部に位置するブーゲンヴィルのバナ地方アガバイ地区ペロ村で10日間、(ii) パプア・ニューギニアの首都ポート・モレスビーで7日間、母語話者と共におこなったものである。この調査は、文部科学省の平成21年度科学研究費、基盤研究(B)「パプア諸語の比較言語学的研究—南ブーゲンヴィル諸語と東シンブー諸語を対象として」(研究代表者：大西正幸；課題番号20320065)の援助を受けている。調査にあたって、大西正幸先生、テレーザさん (Therese Minitong Kemelfield) には話者の紹介や調査方針の相談等、貴重な助言を賜った。マーガレット (Margaret Makaa Luku)、ピーター (Peter Luku) をはじめ、協力してくれた母語話者の皆さん、特に Isiras, Theresa Sipona Wilolopa, Vincent Wilolopa Leelanu, Cecilia Tamukai Hasola, Theresa Nalokata Suagotsu, Thomas, エミル (Emil Mahutz Mehu) とその家族、ポール (Paul Kaabe)、アイサク (Isaac Sipu)、クリス (Christopher Kena)、マガライ (M. Magalai) の各氏に感謝する。また、総合地球環境学研究所の長田俊樹先生主催の言語記述研究会のメンバーから多くの助言をいただき、大西正幸先生、千田俊太郎氏、松本亮氏には本稿の内容について貴重なコメントをいただいた。地球研の寺村裕史氏には、地図の作成作業を手伝っていただいた。この場を借りて御礼申しあげたい。

^{注2} Oliver (1955: 6–7) には、“*Sibbe* (the language spoken by the Nagovisi)”, すなわち「シッベ」という呼称が、ナゴヴィシの人々によって使われている言語を指す、と記されている。

ナゴヴィシ・シベ語の話者数は、1935–1955 年の間で約 3,500 人 (Oliver 1955: 6) ^{注3} , 1963 年の時点で 4,619 人とされている (Allen & Hurd 1965: 4, Oliver 1973: 188)。また, Lewis (2009) によると, 1975 年には 5,000 人と報告されている。

パプア・ニューギニアの 2000 年のセンサス (Office 2002) には, 使用言語ごとの人数は挙げられていないが, ブーゲンビル州の行政上の区画ごとの世帯数, および人数 (男女) がしめされている。

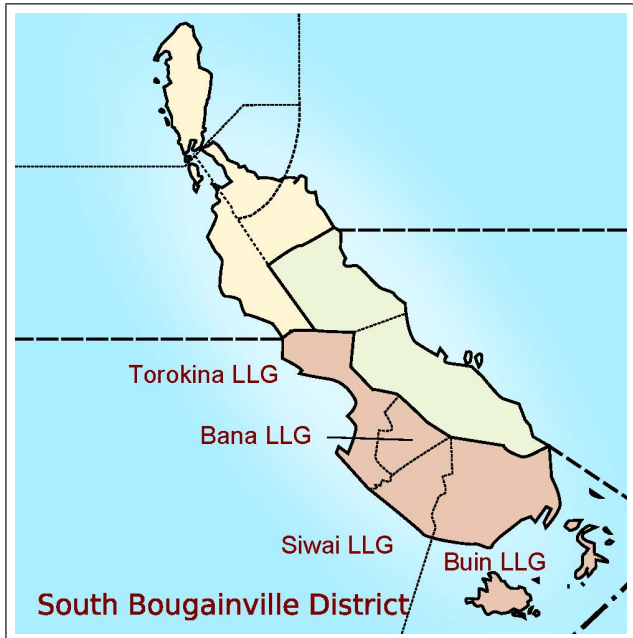


図2 ブーゲンビル州の行政区画

ナゴヴィシ・シベ語の話者は南ブーゲンビル地方 (South Bougainville District) に多い。南ブーゲンビル地方には, (1) にしめす基礎自治体があり, “LLG” (Local Level Government) と呼ばれている。

- (1) a. ブイン LLG (Buin)
- b. シワイ LLG (Siwai)
- c. バナ LLG (Bana)
- d. トロキナ LLG (Torokina)

これらの LLG の下位には, それぞれ区 (ward) という区分があり, バナ LLG の, 東ラマネ区, 南ラマネ区, トマウ区, ヴェリペ区, および, トロキナ LLG のトベラキ区の居住者のうち, 多くはナゴヴィシ・シベ語の話者と考えられる。Office (2002) にしたがって, それぞれの居住者をしめすと, 表 1 のようになる。

表 1 のナゴヴィシ・シベ語話者の多い地域には, 近隣のナーシオイ語 (Hurd & Hurd 1966), モトウナ語 (Onishi 1995), ブイン語 (Laycock 2003) の話者も居住していると思われる。そのため, 2000 年の時点でのナゴヴィシ・シベ語の話者数は, 10,000 人に満たないと予測される。

以下の (2) に, 数人の母語話者から得た, ナゴヴィシ・シベ語の方言名と, それぞれが話される地名を挙げる。この方言区分は, 詳細な調査に基づいていないものであり, 参考として提示する。本論文では, (2b) の太字でしめした方言の類別詞について記述する。

(2) ナゴヴィシ・シベ語 (Nagovisi-Sibe)

- a. ウェリペ方言: クネカ, コーロー, マナナウ, レーラー
- b. トベラキ方言: アガバイ, クボン, ソヴェレ, ターロバ, **ネギタン**, メンダイ, モシノ, ロペレ
- c. トマウ方言: タケマリ, ローマリ, ワタウーナ
- d. ラマネ方言: シアネキ, シアングロー, シコレワ, シピー, パーナン, バコラン, ポペー

表 1 ナゴヴィシ・シベ語話者の多い地域

LLG	区	居住者数 (人)
バナ	東ラマネ	2,336
	南ラマネ	1,834
	トマウ	3,116
	ヴェリペ	1,978
トロキナ	トベラキ	1,510
計		10,774

^{注3} Oliver (1955: 6) では, ブーゲンビルの地図上にナゴヴィシ・シベ語話者の地域がしめされている。その地域内に, 50 人を 1 点として, 70 個の点が描かれている (50 人 × 70 箇所 = 3500 人)。

(6) 人称代名詞：

	1 人称		2 人称		3 人称	
					男性	女性
単数	<i>ni</i>	<i>la'</i>	<i>tee</i>	<i>teng</i>		
双数	<i>ningga</i>	<i>langga</i>	<i>tei</i>			
複数	<i>nii'</i>	<i>lii'</i>	<i>tewoo</i>			

また、名詞句において、名詞を限定する指示詞は、名詞の数と性に関して一致する。(7)に指示詞のパラダイムを挙げる。文法的数は、人称代名詞と同じく、単数・双数・複数が区別され、文法的性は、単数においてのみ区別される。

(7) 指示詞：注⁷

	近称				遠称			
	単数		双数	複数	単数		双数	複数
(性)	男性	女性			男性	女性		
	<i>oo</i>	<i>ang</i>	<i>ai</i>	<i>awoo</i>	<i>tee</i>	<i>teng</i>	<i>tei</i>	<i>tewoo</i>
場所	<i>aa'</i>				<i>te'</i>			
様態	<i>awa</i>				<i>tewa</i>			
種類	<i>awato'</i>				<i>tewato'</i>			

動詞は、(i) 当該の動作・状態をおこなう動作者および被動者の人称、(ii) 文法的数、(iii) 肯否、(iv) 時制・相などにより屈折し、総合的な構成をなす。これらの範疇をあらわす形態素には、それぞれ音韻論的に条件付けられた異形態があり、しばしば音韻論的融合が起こる。動詞は、他動詞、自動詞に分けられ、自動詞には不規則に屈折する「居る」「行く」「来る」「死ぬ」「泣く」の5つがある。

1.3 類別詞

“Classifier”は、「類別詞」「類別辞」「分類詞」「分類辞」という術語で知られている(亀井ほか 1996: 1398–1399)。日本語の術語に見られる「～詞」や「～辞」は、どの形態論的単位を指すかによって使い分けられる場合がある。おおむね、「詞」は、語や自由形態素をあらわし、「辞」は、接辞や拘束形態素をあらわすという具合である。ただ、常に厳格な使い分けがおこなわれているわけではない。「助詞」や「助動詞」が自立的でない形態素を指す通り、「～詞」という表現が言語単位の自立性に関わらず、カバータムのように柔軟に使われている。本論文も、このような柔軟な使い分けに準じ、ナゴヴィシ・シベ語のそれが拘束形態素ではあるが、「類別詞」という名称で呼ぶことにする。

類別詞とは、一般的に言って、名詞類のカテゴリー化をおこなう形態統語的・語彙的な手段(ないし装置)のことである注⁸。ただし、「名詞類のカテゴリー化」と言っても、様々なシステムがある。名詞類別のシステムの中には、(i) 語彙的なシステム、(ii) 文法的なシステム、という二つの極があり、典型的な

注⁷ 「場所」「様態」などは、文法的性的一种(cf. モトゥナ語 Onishi 1995, ナーシオイ語 Hurd 1977),あるいは、クラス標識(class marker: 大西私信)と考えることもできるだろう。

注⁸ 類別詞は、特定の条件下で顕在化する形態素であり、類別詞構文をつくり、関連する名詞が指している物の、知覚特徴ないし属性をしめす(Allan 1977: 285)。類別詞システムのタイプは、(i) 意味、(ii) 目録のサイズ、(iii) 形態統語的なステータス、(iv) 語用論的な使用によって分けられる(Grinevald 2004: 1016)。

類別詞システムとは、両者の中間に位置するようなシステムとされている。このことを、図3に、名詞類別のシステムの略図としてしめす。

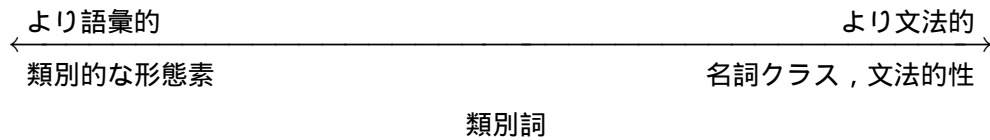


図3 名詞類別のシステム：Grinevald (2000: 61) に基づく

図3の通り、より文法的な名詞類別システムとして、名詞クラスと文法的性 (gender) の、2つのシステムがある。名詞クラスのシステムは、バントゥ諸語に広く見られる。文法的性のシステムは、様々な言語に広く見られ、印欧諸語の例がよく知られている。これら2つの名詞類別システムには次のような特徴が共通している：(i) 全ての名詞類を類別する、(ii) 類別的特徴の種類が少ない(例：男性、女性、中性...)、(iii) 類別される名詞への、類別特徴の割り当てが非有契的である場合がある。

また、図3の、「より語彙的な、類別的な形態素」とは、(8)のラマ語 *-kat* [木、固く長い物] のような形態素のことを言う。

(8) ラマ語 (チブチャ語族, ニカラグア, Grinevald 2000: 59–60)

-kat [木、固く長い物 (=棒)]

- a. *patang-kat* 「マングローブの木」
- b. *sumuu-kat* 「バナナの木」
- c. *kiing-kat* 「首 (頭 + 棒)」
- d. *kwiika-kat* 「腕 (手 + 棒)」

このような「類別的な形態素」は、新たな名詞を派生しているにすぎず、量化表現や他の構文ではもちいられない (Grinevald 2000: 60)。したがって、文法的な役割ではなく、語彙的な、レキシコンに関わる役割を果たすものとみなされる。

類別詞の中では、例えば日本語で動物を数えるために使う「匹」等の、助数詞がよく知られている (Aikhenvald 2000: 98, Grinevald 2004: 1019)^{注9}。Aikhenvald (2006: 466) によると、助数詞は東南アジアに集中する孤立型の言語に比較的好く見られる。また、南アメリカの諸言語、日本語、朝鮮語、トルコ語等の膠着型の言語や、ドラヴィダ諸語などの融合型の言語も助数詞を持っている^{注10}。助数詞を持つ言語の分布を地域別に見た場合、アフリカではかなり稀であり、オーストラリアでは皆無である (Aikhenvald 2000: 124)。

Gil (2005) は、助数詞に関して、世界の言語を次の3種類、すなわち、(1) 助数詞を持たない (260言語)、(2) 数える際に使用が随意的な助数詞を持つ (62言語)、(3) 数える際に必須の助数詞を持つ (78言語) に分け、図4の分布図を提示している。

以下では、南ブーゲンヴィル諸語の中のナゴヴィシ・シベ語における類別詞について記述する。

^{注9} 後述する「多重類別型言語」の表2からも、助数詞の用法が最も広く見られることがわかる。

^{注10} Dixon (1986: 109) も、言語の古典的な類型 (屈折 (=融合), 膠着, 孤立) と、当該の言語がとる名詞類別のシステム間の相関性、含意的傾向を指摘している。

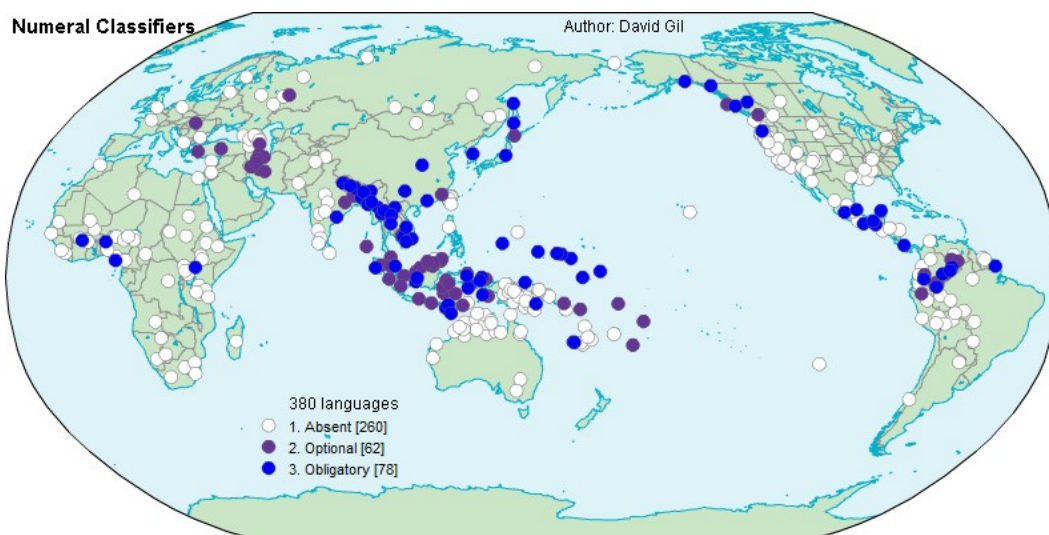


図4 助数詞を持つ言語の分布 (Gil 2005)

2 類別詞の構文

南ブーゲンヴィル諸語は、類別詞として機能する多くの形態素を持っている。その形態素は拘束形態素であるため、「類別辞」と呼ぶこともできるだろう。ナーシオイ語の類別詞の数は100を超える (Hurd 1977)。モトゥナ語には少なくとも51個の類別詞があり (Onishi 1995)、ブイン語には少なくとも29個の類別詞がある (Laycock 2003: 246–250)。

多数の類別詞を持つ言語はいくつか知られているが、類別詞が幾つもの形態統語的な環境、ないしロカス (locus) に出現する点で、ナーシオイ語やモトゥナ語が言語類型論的に注目されている。Aikhenvald (2000) は、その環境を (i) 形容詞, (ii) 助数詞, (iii) 名詞, (iv) 動詞, (v) 所有^{注11}, (vi) 位格, (vii) 直示、と7つに分け、一つの類別詞のセットを複数の環境で繰り返し使うタイプの言語を「多重類別型言語」 “Multiple Classifier Language” と呼んでいる。ナーシオイ語やモトゥナ語は、この多重類別型言語の一つとして紹介されている。

表2 類別詞のセットを複数の環境で用いる多重類別型言語：Aikhenvald (2000: 207) に基づく

環境の数	形容詞	助数詞	名詞	動詞	所有	位格	直示	言語
2	–	✓	–	✓	–	–	–	アニンディリャグワ語
	–	–	–	✓	–	✓	–	イーヤック語
3	✓	✓	–	–	–	–	✓	ネワール語
	✓	✓	–	✓	–	–	–	ワウラ語, マチゲンガ語
4	✓	✓	✓	–	–	–	✓	タイ語
	–	✓	✓	–	✓	–	✓	フモン語
	✓	✓	–	✓	–	–	✓	ヤワ語, ムンドゥルク語
5	✓	✓	–	✓	✓	–	✓	ナーシオイ語, モトゥナ語

注¹¹ 所有類別詞は, Grinevald (2000: 66), Grinevald (2004: 1021) にあるように, 属格類別詞 (genitive classifier) と呼んでもよいだろう。

類別詞のセットが、(i) 形容詞、(ii) 助数詞、(iv) 動詞、(v) 所有、(vii) 直示に、共通して使われることはほとんどない (Aikhenvald 2000: 219)。しかし、ナーシオイ語とモトゥナ語は、このうちの 4~5 種類の環境で類別詞を使うため、類型論的に稀なタイプの言語とみなされている^{注12}。

南ブーゲンヴィル諸語の一つであるナゴヴィシ・シベ語では、数詞・指示詞・不定表現・疑問詞・代名詞・形容詞の拘束形式に類別詞を添加することができ、多様な名詞句表現をつくることができる。特に、助数詞の構文においては義務的に用いられる (cf. Gil 2005)。これは、ナゴヴィシ・シベ語のほとんどの数詞が、拘束形態素であり、かつ、名詞に直接付加できないため、数詞とともに必ず助数詞を使わなければならないからである (本論文の注 14 も参照されたい)。

現段階で、ナゴヴィシ・シベ語の類別詞は 59 個見つかり、それらを使い分けることによって、名詞の指す事物を様々に描写することができる。

以下、§ 2.1 では、ナゴヴィシ・シベ語における名詞句での類別詞の使用について述べ、§ 2.2 では、助数詞を記述する準備として、数詞、計数のしくみ、名詞の数え方について概観する。

2.1 名詞句

ナゴヴィシ・シベ語では語類横断的に類別詞を添加し得る。厳密に言うと、様々な語類の拘束形式に類別詞を添加することができ、その結果、様々な類別詞構文を作ることができる。特に、類別詞は名詞句が持つ意味内容の大部分を表示する役割を担う。本小節では、(9) に挙げる語類の拘束形式を扱う。

- (9) a. 指示詞： (11); a- 「この」、te- 「あの」
b. 「他の」： (12a); mooka- 「他の」
不定： (12b); nii'na- 「何かの」
c. 疑問詞： (13); ai'na- 「何の、どの」
d. (所有) 代名詞： (16); nggana- 「私の」、lakana- 「あなたの」、wakana- 「彼(女)の」
e. 形容詞： (17); paga- 「大きい」、waika- 「小さい」、
nelaka- 「新しい」、ulika- 「古い」

以下、*buu'* 「川、水」のための類別詞 *-wili'* を例に記述をおこなう。他の類別詞については § 3 にリストしてあるので、そちらを参照されたい。

(10) は、指示詞の拘束形式に類別詞が添加した例で、その名詞句の主要部は *buu'* 「川、水」である。この例では、(10a) は、近称・単数・男性の指示詞の自由形式 *oo* と拘束形式 *a-* による例、(10b) は、遠称・単数・男性の指示詞の自由形式 *tee* と拘束形式 *te-* による例であるいずれも、[指示詞拘束形式 + 類別詞] という構成の語を含む。

- (10) *buu'* 「川」
a. *oo (buu') awili'* 「この川」
b. *tee (buu') tewili'* 「あの川」

(10) のような名詞句では、主要部名詞の *buu'* 「川」が随意的である。したがって、(10a) 「この川」は、*oo awili'*、(10b) 「あの川」は、*tee tewili'* のように、主要部欠如の名詞句を作ってもかまわない。注意したいのは、[指示詞拘束形式 + 類別詞] を省略し、**oo buu'* や、**tee buu'* とすることができない点である。つまり、「この川」や「あの川」のような名詞句では、類別詞が義務的に用いられる。

^{注12} 南ブーゲンヴィル諸語の類別詞が使われる、(a) 指示詞、(b) 冠詞、(c) 「他の」、(d) 疑問詞の 4 つは、「決定詞」 “determiner” として一つにまとめられ、直示と同様に扱われている (Aikhenvald 2000: 220)。

さらに, *nawato* '「ある種の」'を使って, (11) のように表現することもできる。

- (11) a. (*buu*') *awili*' *nawato*' 「この種の川」
 b. (*buu*') *tewili*' *nawato*' 「あの種の川」

次の (12) は, 「他の」や, 不定をあらわす拘束形式に類別詞 *-wili*' が添加した例である。

- (12) a. *mookawilikoo* 「他の川で」
 b. *nii'nawilikoo* 「どの川でも」

(12a) では *mooka-* 「他の」, (12b) では *nii'na-* 「どの」という拘束形態素に類別詞が添加し, 末尾には格標識 *-koo* が接尾している。このような名詞句では, *buu*' 「川」はふつう使われない。

ここで, ナゴヴィシ・シベ語における「他の」, 不定をあらわす語について概観しておきたい。表 3 にしめすように, 「他の」や, 不定表現は, 意味と用法が互いに重なり合っている。

表 3 「他の」および不定をあらわす幾つかの語

	<i>-la</i> 「(物)」	<i>-mo</i> 「(人)」	<i>-wato</i> ' 「(種類)」	<i>-wa</i> 「(方法)」
<i>mooka-</i>	<i>mookala</i> 「他」	<i>mookamo</i> 「他の人」	<i>mookawato</i> ' 「他の種」	
<i>nii'na-</i>	<i>nii'nala</i> 「他の物」	<i>nii'namo</i> 「誰か」	<i>nii'nawato</i> ' 「ある種」	<i>nii'nawa</i> 「何とか/他の方法」
<i>peeka-</i>	<i>peekala</i> 「何か (大)」			<i>peekawa</i> 「何としても」

特に, *nii'nawa* は「他の方法」「何とかして」をあらわし, *nii'ngang* (以下の (14) を参照) は「他の時」「ある時」をあらわす。このため, 「他の」と不定は, 一つのまとまった不定表現と考えてよいだろう。(12) で, 両者を一まとめに例示したのはこのためである。

(13) は, 疑問詞の拘束形式 *ai'na-* に類別詞が使われる例である。あわせて, (14) に 3 つの疑問詞 *alewato*' 「どの種」, *alewa* 「どのように」, *ai'ngang* 「いつ」を挙げる。これら 3 つの疑問詞は, 不定表現を派生する際にも使われる接尾辞, *-wato*' 「(種類)」, *-wa* 「(方法)」, *-ng* 「(時)」が添加したものである。

- (13) *ai'nawili*' 「何の川, どの川」

(14)	<i>-wato</i> ' 「(種類)」	<i>-wa</i> 「(方法)」	<i>-ng</i> 「(時)」
<i>ale-</i>	<i>alewato</i> ' 「どの種」	<i>alewa</i> 「どのように」	
<i>ai'na-</i>			<i>ai'ngang</i> 「いつ」
(<i>nii'na-</i>)	<i>nii'nawato</i> ' 「ある種」	<i>nii'nawa</i> 「何とか」	<i>nii'ngang</i> 「ある時, 他の時」)

(13) の疑問表現においても, (12) と同様, 名詞 *buu*' 「川」を使う必要はない。

(6) で見たように, 人称代名詞は, 人称のみならず, 数と性が区別される。(15) に人称代名詞の所有形のパラダイムをしめす。(6) の人称代名詞では, 3 人称単数に男性・女性の別々の形式があるが, 以下の所有形では, 人称と数のみが区別される。語形の末尾に共通して現れる *-ng* についてはよくわかっていない。同系統のモトゥナ語において, *-ng* は被所有者の文法的性に一致する形態素である (Onishi 1995)。

(15) 人称代名詞所有形 (自由形式) :

	1 人称	2 人称	3 人称
単数	<i>nggang</i>	<i>lakang</i>	<i>wakang</i>
双数	<i>neekang</i>	<i>leekang</i>	<i>weekang</i>
複数	<i>niikang</i>	<i>liikang</i>	<i>wiikang</i>

(16) に、人称代名詞による所有名詞句を挙げる。所有名詞句の構成には、主に二種類あり、(i) 所有名詞句の主要部名詞 (*buu'* 「川」) と、所有の自由形式を用いるか、(ii) 所有の拘束形式と、類別詞 (-*wili'* : 主要部名詞を類別する) を用いるというパターンがある。

- (16) a. 「私の川」: *buu' nggang, ngganawili'*
 b. 「あなたの川」: *buu' lakang, lakanawili'*
 c. 「彼(女)の川」: *buu' wakang, wakanawili'*

ここまで見てきたように、不定表現、疑問詞、人称代名詞所有の拘束形式は、末尾の *na* という音節が共通している ((9) を参照されたい)。この *na* は、それぞれの拘束形式と類別詞を結びつける際に必要な形態素であると分析できる。

(17) に、形容詞の拘束形式に類別詞が添加される例を挙げる。(16) の人称代名詞の所有名詞句と同様、連体的な形容詞を用いた名詞句にも二種類の構成パターンが見られる：(i) 主要部名詞と、形容詞の自由形式の構成、(ii) 形容詞拘束形式と、類別詞の構成である。

- (17) a. 「大きい川」: *buu' panna', pagawili'*
 b. 「小さい川」: *buu' waikesi, waikawili'*
 c. 「新しい川」: *buu' nelakala, nelakawili'*
 d. 「古い川」: *buu' ulikala, ulikawili'*

現段階で、類別詞が付く形容詞の拘束形式としては (17) の「大きい」「小さい」「新しい」「古い」の 4 つが見ついている。ここで注意しておきたいのは、(17a) と (17b) の形容詞語根が、自由形式と、拘束形式との間で形が違う点である。このような語根の形式的相違は、(17c) の「新しい」と (17d) の「古い」との間には見られない。実は、拘束形式の *paga-* 「大きい」と *waika-* 「小さい」は、それぞれ、「多い」と「少ない」に対応している。

- (18) a. *panna'* 「大きい」 — *paga-* (形容詞拘束形式) — *pagago* 「多い」
 b. *waikesi* 「小さい」 — *waika-* (形容詞拘束形式) — *waikalaa'* 「少ない」

以上、本小節では、ナゴヴィシ・シベ語において、一つの類別詞が様々な語類に付属することを観察した。ナゴヴィシ・シベ語の類別詞は、Aikhenvald (2000) の類型論的枠組みの観点から見ると、表 2 の中の「形容詞」「所有」「直示」という、少なくとも 3 つの形態統語的環境で使われる。次小節では、助数詞を観察する準備として、ナゴヴィシ・シベ語の計数のしくみについて記述する。

2.2 計数のしくみと名詞の数え方

ナゴヴィシ・シベ語の数のあらわし方は、五を基準にした五進法である。これは片手の指の数に由来した数え方である。母語話者に、0 や 1 から 10 まで数を数えてもらおうと、以下の表 4 のようになる。

表4 計数：0~10

0 <i>kaamoi</i>	
1 <i>nabole'</i>	6 <i>naboleke noola</i>
2 <i>keboleka</i>	7 <i>kebolekai noola</i>
3 <i>weelegoi'</i>	8 <i>weelegoike noola</i>
4 <i>posi'nami'</i>	9 <i>posi'namike noola</i>
5 <i>pa'noko'</i>	10 <i>noola</i>

0, 5, 10 と 1~4 は 1 語だが, 6~9 は, 1~4 の形式と 10 の形式を組み合わせた句であらわされる。6~9 は, おおむね, 「10 に向かうときの *x*」と読み取れるような句を形成する。その句に含まれる, 「向かうときの」にあたる形式には, -ke と -i の異形態がある。双数をあらわす -ka の直後に生起して [- 双数 - 向かうときの] となるときに限り, -ke が添加した -ka-ke ではなく, -ka-i となる。これは, k...k の隣接を避けて kake の後部の /k/ を削除し, その後 kae の音素配列 /ae/ を避けて /e/ を /i/ で代用するプロセスが生じ, その結果 kei [- 双数 - 向かうときの] が得られるのだと考えることができる^{注13}。

表5 計数：11~50

11 <i>noola nabole'</i>	16 <i>noola (maka') naboleke noola</i>
12 <i>noola keboleka</i>	17 <i>noola (maka') kebolekai noola</i>
13 <i>noola weelegoi'</i>	18 <i>noola (maka') weelegoike noola</i>
14 <i>noola posi'nami'</i>	19 <i>noola (maka') posi'namike noola</i>
15 <i>noola pa'noko'</i>	20 <i>nannamoo'</i>
21 <i>nannamoo' nabole'</i>	26 <i>nannamoo' naboleke noola</i>
22 <i>nannamoo' keboleka</i>	27 <i>nannamoo' kebolekai noola</i>
23 <i>nannamoo' weelegoi'</i>	28 <i>nannamoo' weelegoike noola</i>
24 <i>nannamoo' posi'nami'</i>	29 <i>nannamoo' posi'namike noola</i>
25 <i>nannamoo' pa'noko'</i>	30 <i>nannamoo' noola (20+10)</i>
31 <i>nannamoo' noola nabole'</i>	36 <i>nannamoo' noola maka' naboleke noola</i>
32 <i>nannamoo' noola keboleka</i>	37 <i>nannamoo' noola maka' kebolekai noola</i>
33 <i>nannamoo' noola weelegoi'</i>	38 <i>nannamoo' noola maka' weelegoike noola</i>
34 <i>nannamoo' noola posi'nami'</i>	39 <i>nannamoo' noola maka' posi'namike noola</i>
35 <i>nannamoo' noola pa'noko'</i>	40 <i>nangkemooka</i>
41 <i>nangkemooka nabole'</i>	46 <i>nangkemooka naboleke noola</i>
42 <i>nangkemooka keboleka</i>	47 <i>nangkemooka kebolekai noola</i>
43 <i>nangkemooka weelegoi'</i>	48 <i>nangkemooka weelegoike noola</i>
44 <i>nangkemooka posi'nami'</i>	49 <i>nangkemooka posi'namike noola</i>
45 <i>nangkemooka pa'noko'</i>	50 <i>nangkemooka noola (40+10)</i>

注13 モトウナ語には, 様々な機能を持つ具格接尾辞 -ki (~ngi~i) がある。この接尾辞は, 「道具」以外にも, 場所名詞を主要部とする名詞句内に添加して「通過点」をあらわすが, 計数の形式においても 10 や 20 に向かうときの「通過点」をあらわす (Onishi 2004: 93, 96-97)。ナゴヴィシ・シベ語の -ke (~i) がモトウナ語の -ki (~ngi~i) と同源なのは間違いないが, ナゴヴィシ・シベ語の具格の考察は今後の課題としたい。

11~50 のあらわし方は、表 5 にしめした通りである。11~19 は、*noola* 「十」を使って、「10 と 1」, 「10 と 2」, 「10 と 3」... のような句を形成し、21~29, 31~39, 41~49 も同様に、20, 30, 40 それぞれの表現に、1~9 を加えてあらわす。その際、*maka* 「~と」が随意的に使われる場合がある。

表 6 計数：20~200

20	<i>nannamoo'</i>	120	<i>nannauloke nalai'</i>
40	<i>nangkemooka</i>	140	<i>nangkeulokai nalai'</i>
60	<i>nanweenalou</i>	160	<i>nanweenalouke nalai'</i>
80	<i>nangkalenalou</i>	180	<i>nangkalenalouke nalai'</i>
100	<i>nanwounalou</i>	200	<i>nalai'</i>

表 7 計数：200~1000

200	<i>nalai'</i>
400	<i>kenaika</i>
600	<i>weekaipi</i>
800	<i>kalekaipi</i>
1000	<i>kokolei namoo</i>

表 5 を見ると、**20** *nannamoo'*、**40** *nangkemooka* は 1 語だが、それ以外の数は、1~4, 5, 6~9, **10** を組み合わせた句で表現することがわかる。例えば、「36」は、「20 と 10, および 10 に向かうときの 1」のような句をつくってあらわす。

表 6 にしめした通り、二十を基準として、20~200 の数があらわされる。二十を基準とした計数は、両手両足の全ての指の数、つまり 1 人の人間の指の数に由来した数え方である。ここで、20~200 の計数と、表 4 の 0~10 の計数の間に類似点が見られることに注意したい：**20, 40, 60, 80, 100, 120, 140** と **200** は 1 語であり、160, 180 は、**60, 80** と **200** の形式を組み合わせ、「200 に向かうときの 60」「200 に向かうときの 80」のような句を形成してあらわす。

さらに、200~1000 の数え方は、二百を基準としておこなわれる。1~200 によって 399 まで表現することができるが、400 をあらわすためには、それ特有の表現が必要になる。そのため、二百ごとに特有の単語 1 語が使われるのである。

表 4, 6, 7 に見られる語の形式から、以下の (19) にしめす通り、「一~五」の数語幹、すなわち数詞の拘束形式を分析することができる (nan(g)- については § 3 の [44] の解説および、(25) を参照されたい)。

(19) 数語幹：

- | | | | | | |
|-------------------|-----|--------------|--------------|-------------|-------------|
| a. na- ： | 「一」 | 1 (-bole'), | 20 (-moo'), | 120 (-ulo), | 200 (-lai') |
| b. ke- ： | 「二」 | 2 (-bole), | 40 (-moo), | 140 (-ulo), | 400 (-nai) |
| c. wee- ： | 「三」 | 3 (-legoi'), | 60 (-nalou), | | 600 (-kai) |
| d. kale- ： | 「四」 | | 80 (-nalou), | | 800 (-kai) |
| e. wou- ： | 「五」 | | 100 (-nalou) | | |

ただし, (19e) の「五」をあらわす **wou-** は, 5 にも 1000 にも使われず, 計数の例においては, 100 の一例のみに見つかっている。

以下の (20) に, 名詞を数える名詞句の構成を, *buu'* 「川」を使って例示する。(20e) の **wou-** 「五」には, 異形態として **bou-** があることがわかる。これらは, b~w の自由異音による異形態である。

- (20) *buu'* 「川」
- | | | |
|----------|---------------------------------------|---------------------------------|
| a. 1 つ : | <i>buu' nawili'</i> | (<i>nabole'</i> 「一」) |
| b. 2 つ : | <i>buu' kewilika</i> | (<i>keboleka</i> 「二」) |
| c. 3 つ : | <i>buu' weewilika</i> | (<i>weelegoi'</i> 「三」) |
| d. 4 つ : | <i>buu' kalewilika</i> | (<i>posi'nami'</i> 「四」) |
| e. 5 つ : | <i>buu' wouwilika, buu' bouwilika</i> | (<i>pa'noko'</i> 「五」) |
| f. 6 つ : | <i>buu' nawilike noola</i> | (<i>naboleke noola</i> 「六」) |
| g. 7 つ : | <i>buu' kewilikai noola</i> | (<i>kebolekai noola</i> 「七」) |
| h. 8 つ : | <i>buu' weewilikai noola</i> | (<i>weelegoike noola</i> 「八」) |
| i. 9 つ : | <i>buu' kalewilikai noola</i> | (<i>posi'namike noola</i> 「九」) |
| j. 10 : | <i>buu' noola</i> | (<i>noola</i> 「十」) |

名詞を数える名詞句にも, §2.1 のものと全く同じ類別詞 **-wili'** がもちいられる。なお, (20j) の「10 筋の川」では, 類別詞を使わず, 数詞が直接的に名詞を修飾することが可能である。しかし, それ以外の「1 筋~9 筋」の場合, 類別詞は義務的に用いられる^{注14}。

(20) の例と, 計数の例を比較すると, 幾つかの助数詞を分析することができる。それは, 表 4-7 ですで見えた数詞に含まれている助数詞である。以下の (21) に, その助数詞を列挙する。

- (21) a. **-bole(?)** : *nabole'* 「1」(*naboleke noola* 「6」), *keboleka* 「2」
 b. **-legoi(?)** : *weelegoi'* 「3」(*weelegoike noola* 「8」)
 c. **-moo** : *nannamoo'* 「20」, *nangkemooka* 「40」
 d. **-nalou** : *nanweenalou* 「60」, *nangkalenalou* 「80」, *nanwounalou* 「100」
 e. **-ulo** : *nannauloke nalai'* 「120」, *nangkeulokai nalai'* 「140」
 f. **-lai'~-nai** : *nalai'* 「200」, *kenaika* 「400」
 g. **-kai** : *weekaipi* 「600」, *kalekaipi* 「800」

§3 の (25) でも言及するが, (21a, 21b) の **-bole(?)**, **-legoi(?)** は「石」「星」「部屋」「芋」[果物等の実全般]などに使う一般的類別詞であり, その他, (21c-21e) の **-moo**, **-nalou**, **-ulo** は「人」に使い, (21f) **-lai'~-nai** と, (21g) **-kai** は「10 人」という一かたまりに使われる。

以下の §3 では, 現段階で見つかっている類別詞を取り上げ, 助数詞の構文における形態法に基づいて, 類別詞の分類・記述をおこなう。

^{注14} そのため, 図 4 で見た Gil (2005) による助数詞のタイプ分けの観点から見ると, ナゴヴィシ・シベ語は, 1~9 を使って名詞を数える際, 義務的に助数詞を使うタイプの言語と言えるが, 10 の場合に助数詞を使わない点には注意すべきだろう。

3 類別詞のリストと形態法

ナゴヴィシ・シベ語の類別詞は、拘束形態素であり、「類別辞」と呼ぶこともできるが (cf. 稲垣 2009), § 1.3 でも述べたとおり、「類別詞」というカバータームを用いることにする。

ここでは、[数語幹 - 類別詞 - 文法的数の接尾辞] という内部構造を持った計数の形式を 1~5 まで例示し、(i) 文法的数 3 つを区別するタイプ 1、(ii) 2 つの数を区別するタイプ 2、(iii) 3 つの数を区別し、異形態が語彙的に条件付けられているタイプ 3、(iv) 「1」の数をあらわす形式が、序数 (= 「1 番目」) と同じ形式をとるタイプ 4、(v) 「2」の数までしかあらわせないタイプ 5 の類別詞に分けて記述をおこなう。

(22) 計数の形式の内部構造： 数語幹 - 類別詞 - 文法的数の接尾辞

- a. タイプ 1：文法的数が 3 つ区別される。類別詞には音韻論的に条件付けられた異形態があり得る
- b. タイプ 2：文法的数が 2 つ区別される。類別詞には音韻論的に条件付けられた異形態があり得る
- c. タイプ 3：文法的数が 3 つ区別される。類別詞には語彙・形態論的に条件付けられた異形態がある
- d. タイプ 4：「1」の数をあらわす形式が、序数 (= 「1 番目」) と同じ形式をとる
- e. タイプ 5：「2」の数までしかあらわせない

それぞれの類別詞は、添加される文法的数の形式に基づいてアルファベット順に列挙する。その中で、類別詞自体の形式もアルファベット順に並べる。類別詞ごとに記述する内容は、(i) [番号]、(ii) 「類別詞の意味」、(iii) (数える対象をあらわす名詞)、(iv) 計数の形式と「その意味」である。

■ タイプ 1：3 つの文法的数；異形態 (音韻論的)

このタイプの類別詞の形式は、音韻論的に条件付けられた、規則的な異形態を持つ場合がある。その異形態のほとんどは、末尾に声門閉鎖音を持たない形式 **-FORM** と末尾に声門閉鎖音を持つ形式 **-FORM'** の交替によるものである。そのため、類別詞の形式は **-FORM(?)** のように表示する。

類別詞の形式に含まれる末尾の声門閉鎖音は、「語末」という環境でのみ顕現する。したがって、「語中」という環境に置かれると現れない。これは、(23) のような、直後に音が続く場合に声門閉鎖音を削除する規則として定式化できる。この規則は、(12) で見たように、格標識が続く場合も適用される。

(23) /' / → ∅ / __ C or __ V

数：単数 -∅；双数 -ba；複数 -bi

[1] **-lu**：「本(太)」 (*bana*「(支える)杖・棒」, *koiwala*「キャッサバ・タピオカ」, *luubu*「舞踊の槍」);
na-lu-∅「1本」, ke-lu-ba「2本」, wee-lu-bi「3本」, kale-lu-bi「4本」, bou-lu-bi「5本」

数：単数 -∅；双数 -da；複数 -du

[2] **-bo**：「10豚等」 (*poulo'*「豚」等); na-bo-∅「10頭」, ke-bo-da「20頭」, wee-bo-du「30頭」,
kale-bo-du「40頭」, bou-bo-du「50頭」

[3] **-ma**：「房(バナナ)」 (*wila*「バナナ」); na-ma-∅「1房」, ke-ma-da「2房」, wee-ma-du「3房」,
kale-ma-du「4房」, bou-ma-du「5房」

- [4] **-me** : 「台」 (*taatalu* 「キッチン両端の長椅子」 (= *sigesige*), *tammaa* 「ベッド」); *na-me-∅* 「1台」, *ke-me-da* 「2台」, *wee-me-du* 「3台」, *kale-me-du* 「4台」, *bou-me-du* 「5台」
- [5] **-we** : 「歯」 (*kaliwe* 「歯(全部)」, *kawe* 「歯(一本)」); *na-we-∅* 「1歯」, *ke-we-da* 「2歯」, *wee-we-du* 「3歯」, *kale-we-du* 「4歯」, *bou-we-du* 「5歯」
- [6] **-wi** : 「本(細)」 (*aime* 「釣糸」, *mou* 「ココナッツ 10 個のストリング」, *nabiya'* 「調理したサゴ」, *puli* 「主根」, *simee* 「紐」, *walaama* 「鰻」, *witu* 「縄」); *na-wi-∅* 「1本」, *ke-wi-da* 「2本」, *wee-wi-du* 「3本」, *kale-wi-du* 「4本」, *bou-wi-du* 「5本」

[2] に挙げた計数の形式は、10~50 頭をあらわすものである。ここで用いられる類別詞は、10 頭を一かたまりとみなす。そのため、10 頭は単数、20 頭は双数、30 頭以上は複数というように、文法的数の形態素との共起が見られる。

数：単数 *-∅*；双数 *-ka*；複数 *-aa*

- [7] **-lii**(?) : 「飾」 (*wiasii'* 「貝貨」^{ばいがか}, *biili* 「ビーズ首飾り」, *padapada* 「首飾り」); *na-lii'-∅* 「1飾」, *ke-lii-ka* 「2飾」, *wee-lii-aa* 「3飾」, *kale-lii-aa* 「4飾」, *bou-lii-aa* 「5飾」
- [8] **-mii**(?) : 「山」 (*bui* 「ヤム」, *kanukana'* 「コンコンタロ」, *koiwala* 「キャッサバ」, *naana'* 「タロ」, *sapaia'* 「薩摩芋」); *na-mii'-∅* 「1山」, *ke-mii-ka* 「2山」, *wee-mii-aa* 「3山」, *kale-mii-aa* 「4山」, *bou-mii-aa / pa'noko'* 「5山」
- [9] **-muli**(?) : 「黍」 (*buulika* 「玉蜀黍^{とうもろこし}の一種」, *kousopa'* 「玉蜀黍」); *na-muli'-∅* 「1黍」, *ke-muli-ka* 「2黍」, *wee-muli-aa* 「3黍」, *kale-muli-aa* 「4黍」, *bou-muli-aa* 「5黍」
- [10] **-(wee)li**(?) : 「本」 (*aibrid* 「鯉」, *kalege* 「魚」, *lapo* 「髪」, *nawato* 「羽」, *niili'* 「釘」, *pensolo* 「鉛筆」, *sikaala'* 「煙草」, *soosesi* 「ソーセージ」, *tukaa'* 「矢」, *waapau'* 「槍」); *na-(wee)li'-∅* 「1本」, *ke-(wee)li-ka* 「2本」, *wee-li-aa* 「3本」, *kale-li-aa* 「4本」, *bou-li-aa / pa'noko'* 「5本」
- [11] **-wili**(?) : 「筋(川)」 (*buu'* 「川」); *na-wili'-∅* 「1筋」, *ke-wili-ka* 「2筋」, *wee-wili-aa* 「3筋」, *kale-wili-aa* 「4筋」, *bou-wili-aa* 「5筋」

-weeli' 「本」には、音韻論的に条件付けられた *-weeli'* ~ *-weeli* ~ *-li'* ~ *-li* という異形態がある。*-weeli'* ~ *-weeli* および *-li'* ~ *-li* の交替は(23)の規則によるものだが、*-weeli'* ~ *-li'* および *-weeli* ~ *-li* の交替はそれ以外の要因による。「3本」の場合、仮に *-weeli* をそのまま使うと、*wee-weeli-aa* となり、*/wee/* という音節が重複してしまう。この重複は、類別詞の初頭音節を削除することで回避され、その結果、*wee-li-aa* という形式となる。ここで生じる類別詞の短縮形 *-li* が、類推によって「4本」「5本」の計数にも使われる。「1本」「2本」の場合は、類別詞の短縮形が随意的に使われる。

数：単数 *-∅*；双数 *-ka*；複数 *-i*

- [12] **-lo**(?) : 「切(細長)」 (*kololo'* 「バナナの皮、縄の一種」, *latakasi* 「豚の切り身」, *poulo'* 「豚」); *na-lo'-∅* 「1切」, *ke-lo-ka* 「2切」, *wee-lo-i* 「3切」, *kale-lo-i* 「4切」, *bou-lo-i / pa'noko'* 「5切」
- [13] **-male**(?) : 「年」 (*mai* 「年」); *na-male'-∅* 「1年」, *ke-male-ka* 「2年」, *wee-male-i* 「3年」, *kale-male-i* 「4年」, *bou-male-i / pa'noko'* 「5年」

- [14] **-ne(?)**:「枚(小)」 (*baalo*「布」, *kaato'*「サゴの葉」, *kone*「ココヤシ葉」, (*laka*)*lakamaa*「毛布」, *pada'*「葉」, *peepa*「紙」); *na-ne'-∅*「1枚」, *ke-ne-ka*「2枚」, *wee-ne-i*「3枚」, *kale-ne-i*「4枚」, *bou-ne-i*「5枚」
- [15] **-wolo(?)**:「頭」 (*mookono*「亀」, *nabiya'*「未調理サゴのパック」, *poulo'*「豚」); *na-wolo'-∅*「1頭」, *ke-wolo-ka*「2頭」, *wee-wolo-i*「3頭」, *kale-wolo-i*「4頭」, *bou-wolo-i*「5頭」, *na-bo*「10頭」

数：単数 $-\emptyset$ ；双数 $-ka$ ；複数 $-li$

- [16] **-mage**:「膳」 (*kasou'*「二枚貝(食器用)」, *pooku*「フォーク」, *sipunu*「スプーン」); *na-mage-∅*「1膳」, *ke-mage-ka*「2膳」, *wee-mage-li*「3膳」, *kale-mage-li*「4膳」, *bou-mage-li*「5膳」
- [17] **-wedo(?)**:「枚(大)」 (*kubi*「扉」, *tapee'*「板」, *tapesiko*「板」); *na-wedo'-∅*「1枚」, *ke-wedo-ka*「2枚」, *wee-wedo-li*「3枚」, *kale-wedo-li*「4枚」, *bou-wedo-li*「5枚」

ちなみに, *kemageka* は「2膳(の食器)」をあらわすが, 一方で「蟹」もあらわす。蟹は, エサを掴んだり, 口に運んだりするための「ハサミ」を2つ持っているからである。**-mage** という形式は, *mage*「爪」と関連している。

数：単数 $-\emptyset$ ；双数 $-ka$ ；複数 $-pi$

- [18] **-liau(?)**:「袋」 (*besa'*「籠」, *bokata'*「(男の)網袋」, *kakau*「カカオ」, *koopii*「珈琲」, *laisi*「米」, *peku'*「ココヤシの葉で作った手提カバン」, *piinat*「落花生」); *na-liau'-∅*「1袋」, *ke-liau-ka*「2袋」, *wee-liau-pi*「3袋」, *kale-liau-pi*「4袋」, *bou-liau-pi*「5袋」^{注15}
- [19] **-wiaa(?)**:「実(バナナ)」 (*wila*「バナナ」); *na-wiaa'-∅*「1実」, *ke-wiaa-ka*「2実」, *wee-wiaa-pi*「3実」, *kale-wiaa-pi*「4実」, *bou-wiaa-pi* / *pa'noko*「5実」

数：単数 $-\emptyset$ ；双数 $-la$ ；複数 $-li$

- [20] **-lusi**:「歌」 (*sila*「歌」); *na-lusi-∅*「1歌」, *ke-lusi-la*「2歌」, *wee-lusi-li*「3歌」, *kale-lusi-li*「4歌」, *bou-lusi-li*「5歌」
- [21] **-mago**:「腿」 (*mago*「腿」); *na-mago-∅*「1腿」, *ke-mago-la*「2腿」, *wee-mago-li*「3腿」, *kale-mago-li*「4腿」, *bou-mago-li*「5腿」
- [22] **-miku**:「10キナ」 (*maani*「お金」); *na-miku-∅*「10キナ」, *ke-miku-la*「20キナ」, *wee-miku-li*「30キナ」, *kale-miku-li*「40キナ」, *bou-miku-li*「50キナ」
- [23] **-mono**:「10飾」 (*biili*「ビーズ首飾り」, *padapada*「首飾り」, *wiasii'*「^{はいか}貝貨」); *na-mono-∅*「10飾」, *ke-mono-la*「20飾」, *wee-mono-li*「30飾」, *kale-mono-li*「40飾」, *bou-mono-li*「50飾」

注¹⁵ 話者によって, **-liau(?)** ~ **-waake** の交替が見られる場合もある。その際の計数の形式は, *na-liau'-∅*「1袋」, *ke-waake-la*「2袋」, *wee-waake-lu*「3袋」, *kale-waake-lu*「4袋」, *bou-waake-lu*「5袋」である。ここでは, 類別詞の形式が単数の場合と非単数の場合とで異なっており, 「1袋」は補充形式である可能性がある。このようなケースはこの一例に限られるため, さらなる調査が必要である。

- [24] **-walo** : 「回」 (*watei* 「時」); na-walo- \emptyset 「1回」, ke-walo-la 「2回」, wee-walo-li 「3回」, kale-walo-li 「4回」, bou-walo-li 「5回」
- [25] **-wiku** : 「筋(道)」 (*toolulu* 「道」); na-wiku- \emptyset 「1筋」, ke-wiku-la 「2筋」, wee-wiku-li 「3筋」, kale-wiku-li 「4筋」, bou-wiku-li 「5筋」
- [26] **-wisi** : 「軒・艘・台」 (*balusi* 「飛行機」, *kaala'* 「車」, *laupai'* 「クラブハウス」, *pakaasi* 「カヌー」, *pawa* 「家」, *siipii* 「船」, *wiliwili* 「自転車」); na-wisi- \emptyset 「1台」, ke-wisi-la 「2台」, wee-wisi-li 「3台」, kale-wisi-li 「4台」, bou-wisi-li 「5台」
- [27] **-woto** : 「束」 (*kaato'* 「サゴの葉」, *koina'* 「木」, *sisilaki'* 「竹」, *tana* 「砂糖黍」, *wetuwetu* 「薪」); na-woto- \emptyset / *nawoko* 「1束」, ke-woto-la 「2束」, wee-woto-li 「3束」, kale-woto-li 「4束」, bou-woto-li 「5束」^{注16}

[22] と [23] に挙げた計数の形式は、それぞれ 10~50 キナ、10~50 飾をあらわすものである。[2] の類別詞のふるまいと同様、10 が単数、20 が双数、30 以上が複数である。

■ タイプ 2 : 2 つの文法的数 ; 異形態 (音韻論的)

タイプ 2 の類別詞は、大多数が声門閉鎖音を末尾に含む。そのため、タイプ 1 と同様、音韻論的に条件付けられた異形態を持つ。この異形態も、(23) の規則で記述できる。類別詞の形式は **-FORM(*)** のように表示する。

タイプ 1 との主な違いは、計数の形式の末尾に添加される文法的数が 2 種類しかない点である。タイプ 1 では、単数 / 双数 / 複数の 3 種類が区別されるが、タイプ 2 では、単数 / 非単数の 2 種類しか区別されない。文法的数の標識の分析については、§ 4 を参照されたい。

数 : 単数 $-\emptyset$; 非単数 $-ka$

- [28] **-lubo(*)** : 「滴」 (*apo'* 「雫」, *asaala* 「汗」, *talu'* 「涙」, *tuwaa* 「一日に降った雨の回数」); na-lubo'- \emptyset 「1滴」, ke-lubo-ka 「2滴」, wee-lubo-ka 「3滴」, kale-lubo-ka 「4滴」, bou-lubo-ka 「5滴」
- [29] **-meesi(*)** : 「区」 (*mesii'* 「土地」, *osi'* 「村」); na-meesi'- \emptyset 「1区」, ke-meesi-ka 「2区」, wee-meesi-ka 「3区」, kale-meesi-ka 「4区」, bou-meesi-ka 「5区」
- [30] **-mesi(*)** : 「土」 (*mesii'* 「土・地面」); na-mesi'- \emptyset 「1土」, ke-mesi-ka 「2土」, wee-mesi-ka 「3土」, kale-mesi-ka 「4土」, bou-mesi-ka 「5土」
- [31] **-miilu(*)** : 「深み」 (*bong'* 「沼地」, *mato'* 「深み」, *miilu'* 「深い場所」); na-miilu'- \emptyset 「1深み」, ke-miilu-ka 「2深み」, wee-miilu-ka 「3深み」, kale-miilu-ka 「4深み」, bou-miilu-ka 「5深み」
- [32] **-mui(*)** : 「泥」 (*meeto'* 「泥」, *mesii'* 「土地」); na-mui'- \emptyset 「1泥」, ke-mui-ka 「2泥」, wee-mui-ka 「3泥」, kale-mui-ka 「4泥」, bou-mui-ka 「5泥」
- [33] **-naasi(*)** : 「庭」 (*kasi'* 「プランテーション庭園」); na-naasi'- \emptyset 「1庭」, ke-naasi-ka 「2庭」, wee-naasi-ka 「3庭」, kale-naasi-ka 「4庭」, bou-naasi-ka 「5庭」

^{注16} 「一束」を *nawoto* とするか、*nawoko* とするかは方言差による。

- [34] **-wagu(°)**:「弓」 (*baa*「弓」); *na-wagu*-∅「1弓」, *ke-wagu-ka*「2弓」, *wee-wagu-ka*「3弓」, *kale-wagu-ka*「4弓」, *bou-wagu-ka*「5弓」
- [35] **-wile(°)**:「芋」 (*bui*「ヤム」, *koiwala*「キャッサバ」, *sapaia*「薩摩芋」); *na-wile*-∅「1芋」, *ke-wile-ka*「2芋」, *wee-wile-ka*「3芋」, *kale-wile-ka*「4芋」, *bou-wile-ka*「5芋」
- [36] **-wola(°)**:「森」 (*mesi*「土地」, *pola*「森」); *na-wola*-∅「1森」, *ke-wola-ka*「2森」, *wee-wola-ka*「3森」, *kale-wola-ka*「4森」, *bou-wola-ka*「5森」
- [37] **-wuubu(°)**:「張」 (*baanisi*「豚飼育のフェンス」, *toloona*「魚罟(流れを塞ぎ止めるタイプ)」, *waakaane*「魚罟(筒タイプ)」); *na-wuubu*-∅「(網)1張」, *ke-wuubu-ka*「2張」, *wee-wuubu-ka*「3張」, *kale-wuubu-ka*「4張」, *bou-wuubu-ka*「5張」

数：単数 -∅；非単数 *-la*

- [38] **-leuku**:「穴」 (*leuku*「穴」, *kuula*「穴」); *na-leuku*-∅「1穴」, *ke-leuku-la*「2穴」, *wee-leuku-la*「3穴」, *kale-leuku-la*「4穴」, *bou-leuku-la*「5穴」
- [39] **-noowe** ~ **-loowe**:「枝」 (*aagu*「枝」); *na-loowe*-∅「1枝」, *ke-noowe-la*「2枝」, *wee-noowe-la*「3枝」, *kale-noowe-la*「4枝」, *bou-noowe-la*「5枝」

[39]の**-noowe**「枝」と、後述する[46]の**-nai(°)**「10人」には、それぞれ**-loowe**, **-lai'**という音韻論的に予測可能な交替が見られる。これらの交替は、類別詞の初頭音節子音の /n/ ~ /l/ の異音によるものである。[39]では、/l/は「1枝」に、/n/は「2/3/4/5枝」に観察され、その/n/の分布の広さから、**-noowe**を基本形とみなすことができる。**-loowe**や**-lai'**が現れる条件は、数語幹の *na*-「1」が持つ音節頭の鼻音によると考えられる。すなわち、鼻音を頭子音として持つ音節 /na/ と /noo, nai(°)/ が隣接するのを回避するために異化が起こり、頭子音の鼻音性を失った /loo, lai'/ という音節が使われるのである。ただし、[14]の *na-ne'*「1枚」、[33]の *na-naasi'*「1庭」、[42]の *na-ne'*「1着」のように、鼻音性が保持される例もある。このことを考慮すると、/n/ から /l/ への異化プロセスは、散発的に起こるものだと言える。

■ タイプ3：3つの文法的数；異形態（語彙・形態論的）

タイプ1とタイプ2の類別詞には、音韻論的に条件付けられた異形態があることを見た。以下に列挙するタイプ3の類別詞には、規則(23)の声門閉鎖音に関わる異形態もあるが、音韻論的に予測できない特殊な異形態がある。この特殊な異形態は、語彙的ないし形態論的に条件付けられており、「3」以上の計数に補充形式として観察される。「3」以上の場合は複数が標示されるのだが、特殊な異形態を持つ類別詞の中には、複数をあらかず標識と融合して、[... 類別詞 - 複数]とは分節できず、[... 類別詞 + 複数]となっているようなものもある。この[... 類別詞 + 複数]のような形式の類別詞については後述する。以下では、まず、タイプ1の分析において明確に分節された標識 *-aa*, *-bi*, *-i*, *-li*, *-pi* (複数) を抽出し、[... 類別詞 - 複数]と容易に分節できるような例から見ていく。

数：単数 -∅；双数 *-da*；複数 *-li*

- [40] **-mala** ~ **-koumo**:「切」 (*koina*「木」, *koiwala*「キャッサバ」, *puli*「主根」, *sapaia*「薩摩芋」, *wila*「バナナ」, *witu*「縄」); *na-mala*-∅「1切」, *ke-mala-da*「2切」, *wee-koumo-li*「3切」, *kale-koumo-li*「4切」, *bou-koumo-li*「5切」

数：単数 -∅；双数 -ka；複数 -aa

- [41] **-weemo(°) ~ -moi**：「本」 (*koina* '木', *padepade* '梯子', *wetuwetu* '薪'); na-weemo'-∅
「1本」, ke-weemo-ka「2本」, wee-moi-aa「3本」, kale-moi-aa「4本」, bou-moi-aa「5本」

数：単数 -∅；双数 -ka；複数 -bi

- [42] **-ne(°) ~ -la**：「着」 (*kulukulu* '服', *monokulu* 'シャツ'); na-ne'-∅「1着」, ke-ne-ka「2着」,
wee-la-bi「3着」, kale-la-bi「4着」, bou-la-bi「5着」

数：単数 -∅；双数 -ka；複数 -i

- [43] **-wela(°) ~ -wegila**：「月」 (*peigia* '月'); na-wela'-∅「1ヶ月」, ke-wela-ka「2ヶ月」,
wee-wegila-i「3ヶ月」, kale-wegila-i「4」, bou-wegila-i / pa'noko'「5ヶ月」

数：単数 -∅；双数 -ka；複数 -li

- [44] **-la ~ -lala ~ -ki (~ -nalou)**：「10匹」 (*kalaa* '川の海老', *kokolei* '鶏', *silia* '高脚蟹(生)',
walege '鳥'等); na-la-∅「10匹」, ke-lala-ka「20匹」, kelalaka maka' nala「30匹」,
kale-ki-li「40匹」, bou-ki-li「50匹」, boukili maka' nala「60匹」, boukili maka' nala /
nan-wee-nalou maka' nala「70匹」, nang-kale-nalou「80匹」, nangkalenalou maka' nala
「90匹」, nam-bou-nalou「100匹」

- [45] **-wege ~ -wete**：「器」 (*diisi* '皿', *kaapu* '碗', *kepa* 'ココナツの殻(器用)', *kimaa* '蓋',
pelete '平皿'); na-wege-∅「1器」, ke-wege-ka「2器」, wee-wete-li「3器」, kale-wete-li
「4器」, bou-wete-li「5器」

数：単数 -∅；双数 -ka；複数 -pi

- [46] **-nai(°) ~ -lai' ~ -kai**：「10人」 (*imaiko* '友達', *kitale* '子供', *manikumanaa* '女', *nammee* '人',
nugaannala '男'); na-lai'-∅「10人」, ke-nai-ka「20人」, kenaika (maka') nalai /
wee-kai-pi「30人」, kale-kai-pi「40人」(cf. [51] **-moo(°) ~ -nalou** '人(非親族)')

[44], [46]に挙げた計数の形式は、それぞれ、10~100匹、10~40人をあらわすものである。ここで、[2, 22, 23]で見たように、10が単数、20が双数、30以上が複数である。

この計数の形式は、他のものに比べ、不規則的である。「30匹」をあらわすために、wee-「3」を使わず、「20匹と10匹」という句をつくってあらわす。また、60以上の計数には、nan- ~ nang- ~ nam- という接頭辞が添加している。この接頭辞は、末尾の鼻音が調音位置の逆行同化を受けることによって形態音韻論的の交替を見せるため、基底形を /naN/ (/N/は調音位置が未指定の鼻音)とみなすことができる。接頭辞 naN- は人の指の数、すなわち「20」をあらわしており、nan-wee-nalou [20 - 3 - 人] (= 20 × 3 = 60), nang-kale-nalou [20 - 4 - 人] (= 20 × 4 = 80), nam-bou-nalou [20 - 5 - 人] (= 20 × 5 = 100)のように、この接頭辞と数語幹の乗算によって計数が決まる。

[46]における **nai(°) ~ -lai'**の交替については、[39]の直後の記述を参照されたい。

数：単数 -∅；双数 -la；複数 -li

- [47] **-wali** ~ **-mono** : 「茎・樹」 (*asika* 「ヤシの一種」, *koina* 「木」, *maamioke* 「パパイヤ」, *mono* 「茎」, *moosii* 「檳榔」, *natuku* 「杭・柱」, *tubaa* 「支柱」, *wila* 「バナナ」); *na-wali-∅* 「1 茎」, *ke-wali-la* 「2 茎」, *wee-mono-li* 「3 茎」, *kale-mono-li* 「4 茎」, *bou-mono-li* 「5 茎」

「3 以上」の計数の形式において、どの部分が「複数」をあらわすかが不明確な場合がある。そのため、どの部分が類別詞の補充形式であるかということも明確でない。このような類別詞を以下に挙げる。

数：単数 -∅；双数 -da

- [48] **-lo** ~ **-na** : 「日・夜」 (*lou* 「日」, *muu* 「夜」); *na-lo-∅* 「1 日」, *ke-lo-da* 「2 日」, *wee-na* 「3 日」, *kale-na* 「4 日」, *bou-na / pa'noko'* 「5 日」

数：単数 -∅；双数 -ka

- [49] **-bole**(?) ~ **-legoi'** : 「個」 (*bootolo* 「ボトル」, *bui* 「ヤム」, *kaamoi'* 「丸・円」, *kasou'* 「(閉じた、生きている) 二枚貝」, *kaukana'* 「コンコンタロ」, *kobele'* 「石」, *kuluusi* 「西瓜」, *luung* 「部屋」, *maamioke* 「パパイヤ」, *moosii* 「檳榔」, *mou* 「ココナッツ」, *naana'* 「タロ」, *paangke* 「南瓜」, *painaapu* 「パイナップル」, *puuli* 「法螺貝」, *sapaia'* 「薩摩芋」, *silibe'* 「星」, *silia'* 「(縛られた、死んだ) 高脚蟹」, *toosipen* 「ポット」, *waasi* 「マンゴー」); *na-bole'-∅* 「1 個」, *ke-bole-ka* 「2 個」, *wee-legoi'* 「3 個」, *posi'nami'* 「4 個」, *pa'noko'* 「5 個」
- [50] **-mai** ~ **-mailagu** : 「丁」 (*aama* 「槌」, *maleke* 「斧」, *mosika* 「犬」, *naipe* 「ナイフ」, *soo* 「鋸」, *wila* 「バナナ (茎についたままでなっている実の、房の部分)」); *na-mai-∅* 「1 丁」, *ke-mai-ka* 「2 丁」, *wee-mailagu* 「3 丁」, *kale-mailagu* 「4 丁」, *bou-mailagu* 「5 丁」
- [51] **-moo**(?) ~ **-nalou** : 「人 (非親族)」 (*imaiko* 「友達」, *kitale'* 「子供」, *manikumanaa* 「女」, *nammee'* 「人」, *nugaannala* 「男」); *na-moo'-∅* 「1 人」, *ke-moo-ka(ala)* 「2 人」, *wee-nalou* 「3 人」, *kale-nalou* 「4 人」, *bou-nalou* 「5 人」 (cf. [46] **-nai** ~ **-lai'** 「10 人」)
- [52] **-moo**(?) ~ **-ng** : 「匹」 (*kalaa* 「川海老」, *kokolei'* 「鶏」, *silia'* 「高脚蟹 (生)」, *walege* 「鳥」); *na-moo'-∅* 「1 匹」, *ke-moo-ka(ala)* 「2 匹」, *wee-ng* 「3 匹」, *kale-ng* 「4 匹」, *bou-ng / pa'noko'* 「5 匹」
- [53] **-u**(?) ~ **-kago'** : 「つ」 (*igeige'* 「指」, *kalesaa'* 「ことば」, *kobonala* 「物語」, *kukumaka* 「鉤爪」, *mage'* 「爪」, *moola'* 「品詞 (?)」, *muu* 「夜」, *paakota'* 「双子」, *peekala* 「物」, *sikuluu* 「学校」, *siti* 「都市」, *taun* 「町」, *wau* 「食べ物」, *wetu'* 「角、継目」); *na-u'-∅* 「1 つ」, *ke-u-ka* 「2 つ」, *wee-kago'* 「3 つ」, *kale-kago'* 「4 つ」, *pa'noko'* 「5 つ」
- [54] **-ulo**(?) ~ **-nalou** : 「人 (親族)」 (*inaa* 「私の妻」, *inola* 「私の娘」, *inuli* 「私の息子」, *ing* 「私の夫」, *imali* 「私のきょうだい」, *mma'* 「私の父」, *nggo'* 「私の母」); *na-ulo'-∅* 「1 人」, *ke-ulo-ka* 「2 人」, *wee-nalou* 「3 人」, *kale-nalou* 「4 人」, *bou-nalou* 「5 人」

[48] を例にとると、他の類別詞と同様、「1 日」は [1 - 類別詞 - ∅]、「2 日」は [2 - 類別詞 - CV] と、タイプ 1 で見たように、単数および双数を分析することができる。しかし、「3 / 4 / 5 日」のなどの複数は、

(i) 計数の中の **-na** という部分が類別詞，続く $-\emptyset$ が文法的数を担うと見るか，(ii) 計数の中の **-na** という部分が類別詞と文法的数の両方を担うと見るか，2通りの分析が可能である。前者は膠着的な見方で，後者は融合的な見方と言えるだろう。ここでは，**-na** [類別詞 + 文法的数] という融合的な見方をとる。

そもそも，類別詞の異形態が不規則的であるため，[48]–[54] の計数の形式をどのように分析するにしろ，必ず類別詞には補充的な形式をみとめなければならない。言語分析一般に，いったん補充がみとめられれば，厳密に膠着的な分析をほどこす必要がなくなる。ここでも，膠着的な見方に固執せず，融合的な分析をとることにしたい。さらに，ゼロ形態の $-\emptyset$ を単数だけでなく複数をあらかず標識とみなすのは不自然である。仮にその見方をとると，「双数 vs. 非双数」という，ナゴヴィシ・シベ語内部には観察されない対立を新たにもうけることになる。このような分析は，現段階では非経済的である。以上から，[48]–[54] の類別詞の異形態を (24) に挙げる通りに記述する。

- (24) a. [48] : **-na** 「日・夜 (複数)」
 b. [49] : **-legoi'** 「個 (複数)」
 c. [50] : **-mailagu** 「丁 (複数)」
 d. [51] : **-nalou** 「人 (複数)」
 e. [52] : **-ng** 「匹 (複数)」
 f. [53] : **-kago'** 「つ (複数)」
 g. [54] : **-nalou** 「人 (複数)」

なお，[50] の **-mai**～**-mailagu** 「丁」の場合，**-lagu** が複数をあらかず接尾辞であると分析する余地があるが，この類別詞だけに固有の複数接尾辞を認めることになるため，ここではこれ以上分析しない。

また，§ 2.2 で既に見た，計数のしくみに使われる類別詞を見ておこう。以下の (25) に，表 4–7 の計数の形式と使われる類別詞を挙げる。

- (25) a. 表 4 : 1～3 ; [49] **-bole(?)**～**-legoi'** 「個」
 b. 表 6 : 20～100 ; [51] **-moo(?)**～**-nalou** 「人 (非親族)」
 c. 表 6 : 120～180 ; [54] **-ulo(?)**～**-nalou** 「人 (親族)」
 d. 表 7 : 200～800 ; [46] **-nai(?)**～**-lai'**～**-kai** 「10 人」

「20～100」および「120～180」には，[44] で観察された /naN/ 「× 20」の接頭辞が添加する。一方，「200～800」には /naN/ 「× 20」の接頭辞が添加しない。「1～3」以外は，20 を基準とした計数であり，人間の両手両足の 20 本の指を使ったものである。人間の指を使う「20～800」の計数において，人間を数える類別詞が使われるのもそのためであろう。

imaiko' 「友達」，*manikumanaa* 「女」，*nammee'* 「人」，*nugaannala* 「男」などの人間を数える際は類別詞 (非親族の人間 [51]) を使うが，人数を不問とするときは，これらの名詞の単数形，双数形，複数形をしめすだけでよい。すなわち，「友達」は，単数 *imaiko'*，双数 *imaikokaala*，複数 *imaikoli*，「女」は，単数 *manikumanaa*，双数 *manikumaala*，複数 *maniku* のとなる。これは親族名称の場合でも同様である。

■ タイプ 4 : 「1」の数が序数の形式と同じもの

タイプ 1～3 とは違い，タイプ 4 の類別詞は，単数の場合の計数が序数の形式であらわされる。このタイプの類別詞は，*mete'* 「山」を数える (*weka'*)*nawe'*～*-we'* 「岳」が見ついている。この類別詞は，音韻論的・形態論的に条件付けられた異形態があり，(i) 「1 岳」のときは **-nawe'**，(ii) 「2～5 岳」のときは

-weka'nawe', (iii) 「6~9 岳」のときは we(?) が現れる。文法的数については、タイプ 2 と同様、単数 (-∅) vs. 非単数の対立が見られる。「1」~「5」の非単数の形式は類別詞と融合しており、「6」~「9」の非単数の形式は -ka である。

数：単数 -∅；非単数（融合）, -ka

- [55] -(weka')nawe' ~ -we(?) : 「岳」 (mete' 「山」); mme'-nawe'-∅ 「1 岳, 1 番目の山」, ke-weka'nawe' 「2 岳」, wee-weka'nawe' 「3 岳」, kale-weka'nawe' 「4 岳」, bou-weka'nawe' 「5 岳」, na-we-∅-ke noola 「6 岳」, ke-we-ka-i noola 「7 岳」, wee-we-ka-i noola 「8 岳」, kale-we-ka-i noola 「9 岳」

■ タイプ 5：「2」の数までしかあわせない

これまでに見たタイプの類別詞は制限なく数えることができた。以下で見るタイプ 5 の類別詞は、「3」以上の計数の形式が無く、「1」と「2」のみに計数の形式がある。そのため、「1」を「片(方の) ~」、「2」を「両(方の) ~」と訳すことにする。このタイプの類別詞は、現段階で、-long(?) 「耳」、-luta 「目」、-welo(?) 「側」、-wete(?) 「面・方」の 4 つが見つかっている。使われる数語幹や文法的数の形式は、ほかのタイプの類別詞と変わらない。

数：単数 -∅；双数 -ka

- [56] -long(?) : 「耳」 (long 「耳」); na-long'-∅ 「片耳」, ke-long-ka 「両耳」
 [57] -welo(?) : 「側」 (toolulu 「道」や、「岸」); na-welo'-∅ 「片側」, ke-welo-ka 「両側」
 [58] -wete(?) : 「面・方」 (amo' 「頬」, kuluusi 「西瓜」, mou 「ココナッツ」, noonoo' 「乳」, ukamaa' 「肩」); na-wete'-∅ 「片面」, ke-wete-ka 「両面」

数：単数 -∅；双数 -la ~ -∅

- [59] -luta : 「目」 (uta 「目」); na-luta-∅ 「片目」, ke-luta(-la) 「両目」

数語幹が na- 「1」、ke- 「2」のみ使われるように、文法的数の標識も単数と双数のみが使われる。[59] の「目」の場合、文法的数の標示は随意的であり、na-luta-∅ 「片目」、ke-luta-∅ 「両目」としてもよい。

4 文法的数の標識

前節 § 3 で見たように、計数の形式にはさまざまな文法的数の標識が添加される。文法的数の区別は、単数、非単数、双数、複数の 4 種類が観察される。本節では、それぞれの標識の交替について記述する。以下の (26)–(29) に、§ 3 で観察された文法的数の異形態をまとめて列挙する。

- (26) 単数：
 -∅； [1]–[59] (59 個)
- (27) 非単数：
 a. -ka； [28]–[37], [55] (11 個)
 b. -la； [38], [39] (2 個)

- (28) 双数：
- a. **-ba** ; [1] (1 個)
 - b. **-da** ; [2]–[6], [40], [48] (7 個)
 - c. **-ka** ; [7]–[19], [41]–[46], [49]–[54], [56]–[58] (28 個)
 - d. **-la** ; [20]–[27], [47], [59] (10 個)
- (29) 複数：
- a. **-aa** ; [7]–[11], [41] (6 個)
 - b. **-bi** ; [1], [42] (2 個)
 - c. **-du** ; [2]–[6] (5 個)
 - d. **-i** ; [12]–[15], [43] (5 個)
 - e. **-li** ; [16], [17], [20]–[27], [40], [44], [45], [47] (14 個)
 - f. **-pi** ; [18], [19], [46] (3 個)

(26) の通り，本論で扱う 59 個全ての類別詞において，単数は無標示である。

(27) の非単数の形式 **-ka**, **-la** は，(28) の双数の形式 **-ka**, **-la** と同一である。「1」, 「2」, ... と数える際に，「2」の使用頻度が高いため，これの双数標識が，非単数標識として一般化されたと考えられる。さらに，非単数には，最も使用頻度の高い双数の形式 **-ka**, **-la** が使われている。

次に，(28) の双数，(29) の複数の組み合わせのパターンについて述べておきたい。まず，(30) と (31) に述べるのが成り立つ。

- (30) a. 複数の標識に **-aa** を使う類別詞は，双数の標識に **-ka** を使う (逆は成り立たず)
 b. 複数の標識に **-du** を使う類別詞は，双数の標識に **-da** を使う (逆は成り立たず)
 c. 複数の標識に **-i** を使う類別詞は，双数の標識に **-ka** を使う (逆は成り立たず)
 d. 複数の標識に **-pi** を使う類別詞は，双数の標識に **-ka** を使う (逆は成り立たず)
- (31) a. 双数の標識に **-ba** を使う類別詞は，複数の標識に **-bi** を使う (逆は成り立たず)
 b. 双数の標識に **-la** を使う類別詞は，複数の標識に **-li** を使う (逆は成り立たず)

(30) と (31) の記述は，「A ならば B」のように，前件 A が成り立つならば後件 B が成り立つと含意的に述べている。このような含意的な記述では，後件の事実の方がより無標である。したがって，これらの記述に依拠するならば，双数 **-ka**, **-da** と複数 **-bi**, **-li** は無標の形式であると言うことができる。(30, 31) の記述から漏れた，残りの [双数 : 複数] の組み合わせのパターンは合計 3 つあり，(i) [40] の [**da** : **li**]，(ii) [42] の [**ka** : **bi**]，(iii) [16, 17, 44, 45] の [**ka** : **li**] である。これらのパターンは，無標の **-ka**, **-da** (双数) と，無標の **-bi**, **-li** (複数) を組み合わせている^{注17}。

双数標識の異形態は，(32) に挙げる類別詞と共起する。

- (32) a. **-ka** ; bole' lala liau' lii' lo' long' mage mai male' mii' moo' moo' muli' nai' ne' ne'
 u' ulo' wedo' (wee)li' weemo' wege welaa' welo' wete' wili' wiaa' wolo'
 (mage, mai, lala, wege を除き, / '-__)
- b. **-la** ; lusi luta mago miku mono wali walo wiku wisi woto (/ μ μ -__)
- c. **-da** ; bo lo ma mala me we wi (mala を除き, / μ -__)
- d. **-ba** ; lu (/ μ -__)

^{注17} もう一つのパターンに [da : bi] があるが，この組み合わせの双数と複数を使う類別詞は見つかっていない。

(32a) の *mage*, *mai*, *lala*, *wege* を除くと、双数の **-ka** は、類別詞の末尾に声門閉鎖音 /' / がある場合に添加される形式であることがわかる。このうち、*mage* [16], *lala* [44], *wege* [45] は、[双数：複数] の特別なパターンの [**-ka**, **-li**] を持っており、/' / を末尾に持たなくとも、何らかの形態論的要因から、無標の双数 **-ka** を添加する^{注18}。また、*mai* [50] は、文法的数 (複数) と融合する類別詞 (§ 3 の [50] とその直後の解説を参照) の中で、*lo* [48] を除いて、唯一、末尾に /' / を持たない。このように、文法的数と融合する類別詞は、ふつう、無標の双数 **-ka** を添加する。

また、(32b, 32c, 32d) に挙げた、末尾に声門閉鎖音を持たない類別詞は、そのモーラ数 (μ の数) によって双数の形式が決まる。

(32b) の通り、双数標識 **-la** を使う類別詞は、必ず 2 モーラ以上で構成されている (ちなみに、声門閉鎖音 /' / の有無による、双数 **-ka**, **-la** の使いわけは、(27) の非単数の異形態にもあてはまる)。

末尾に声門閉鎖音を持たない 1 モーラの類別詞には、基本的に **-da** が使われる。ただし、2 モーラの *mala* (=32c) にも **-da** が添加される。双数 **-la** を使うと (ke-)*mala-la* が得られるが、*malala* 中の音節 /la/ の連続を避けるため、/l/ → d という異化を起こすのである。

[1] の類別詞 *lu* 「本 (大)」も 1 モーラだが (=32d)、これに添加される複数標識 **-bi** に対して類推がはたさき、複数標識と同じ頭子音 /b/ を持つ **-ba** を双数の標識とする。

複数標識の異形態は、(33) に挙げる類別詞と共に起る。

- (33) a. **-aa** ; *lii' mii' moi muli' weeli' wili'* (/i'-__ ただし *moi* を除く)
 b. **-pi** ; *kai liau' wiaa'* (/u'-__ /a'-__ ただし *kai* を除く)
 c. **-i** ; *lo' male' ne' wegila wolo'* (/o'-__ /e'-__ ただし *wegila* を除く)
 d. **-bi** ; *la lu* (/CV-__ ただし C = /l/)
 e. **-du** ; *bo ma me we wi* (/CV-__ ただし C = /l/ 以外)
 f. **-li** ; *ki koumo lusi mage mago miku mono* (/... $\mu\mu$ -__ ただし *ki*, *wedo'* を除く)
mono walo wedo' wete wiku wisi woto

類別詞末尾の声門閉鎖音 /' / の有無は、複数標識の異形態に大きく関わる。/' / が有れば、必ず **-aa**, **-pi**, **-i** が使われる。/' / が無ければ、主に **-bi**, **-du**, **-li** が使われる。さらに、(33a–33c) にしめしたように、類別詞末尾の /' / の直前の母音が、(a) i か、(b) u/a か、(c) o/e かによって複数をあらかず形式が決まる。一方、(33d–33f) にしめしたように、類別詞自体が (d e) 1 モーラか、(f) 2 モーラ以上か、あるいは、類別詞の頭子音が (d) /l/ か、(e) /l/ でないかによって、複数標識の形式が左右される。

以上から、文法的数をあらかず標識の異形態は、ほとんどが音韻論的に条件付けられていることがわかった。すなわち、直前の類別詞の、(i) 声門閉鎖音、(ii) モーラ数、(iii) 母音の音色、(iv) 子音の音色などによって異形態の形式が決まる。ただし、各異形態がなぜ特定の音素を使うのか、それぞれの音韻論的条件による明確な動機付けは未だよくわかっていない。ただ、親族名称における [双数：複数] の標識に、[..la : ..bi], [..da : ..aa], [da : gu] などが見られるが、これらは文法的数の異形態と関連している可能性があるだろう。現段階では十分な分析はできないが、親族体系との関連も含め、今後の課題としたい。

注18 一方、[双数：複数] の特別な組み合わせの、[**ka : li**] を使う [17] *wedo'* 「枚 (大)」や、[**ka : bi**] を使う [42] *ne'* 「着」には、末尾に声門閉鎖音 /' / がある。このうち、*ne'* 「着」という類別詞は、複数 (=3 以上) の場合に *la* という異形態が現れ、単数・双数 (=2 以下) の場合に *ne'* が現れるのだが、後者の単数・双数の場合は、別の類別詞の [14] *ne'* 「枚 (小)」を補充しているのではないかと思われる。

5 意味による類別詞の分類

どの言語においても、意味的な基盤を持たない類別詞は存在しない。各種の類別詞は、必ず何らかの意味と関連付けられており、類別詞を使い分けることで名詞をさまざまに描写することができる。本節では、ナゴヴィシ・シベ語が持つ類別詞を意味的な観点から分類する。

意味的な分類でしばしば援用されるのは、Allan (1977) の設定した、7 つの基本的な意味カテゴリーである。

(34) 7 つの意味カテゴリー (Allan 1977)

- a. 素材
- b. 形
- c. 一貫性
- d. 大きさ
- e. 場所
- f. 空間配置
- g. 量

当然、(34) の意味カテゴリーは、全ての言語に一律にあてはまるものではない。意味的な基盤は言語個別に設定すべきである。ここでは、Allan (1977) の分類基準を軸としつつ、ナゴヴィシ・シベ語の個別の意味カテゴリーに基づいて類別詞を分類する。

まず、類別詞の意味的な特徴付けとして、以下の3点に注目しておきたい。

- (35) a. 文化的：文化・社会に特化した概念の類別に使う
b. 一般的：意味的に希薄なため、他の類別詞で代用できる
c. 特定の：特定の概念のみの類別に使う

(35a) の、文化・社会にねざしたものとして、(36) の類別詞を挙げることができる。

(36) **-bo** 「10 頭 [2]」、**-miku** 「10 キナ [22]」、**-mono** 「10 飾 [23]」、**-mesi(?)** 「区 [30]」、**-wuubu(?)** 「張 [37]」、**-la ~ -lala ~ -ki (~ -nalou)** 「10 匹 [44]」、**-nai(?) ~ -lai' ~ -kai** 「10 人 [46]」、**-moo(?) ~ -nalou** 「人 (非親族) [51]」、**-ulo(?) ~ -nalou** 「人 (親族) [54]」

-bo、**-miku**、**-mono**、**-lala ~ -ki**、**-lai' ~ -kai**などは「10」を単位とする。「5」を基準とした五進法の計数体系を持つ一方で (cf. § 2.2)、動物、金銭、人間等には特別に「10」の単位を使う。**-mesi(?)**「区」は土地の区画に関わり、**-wuubu(?)**「張」は漁撈や養豚に関わる。**-moo(?) ~ -nalou**と**-ulo(?) ~ -nalou**は、「人」の類別詞だが、親族かどうかによる、特殊な使いわけがある。

(35b) の一般的な類別詞はそれほど多くはない。

(37) **-lu** 「本 (太い) [1]」、**-bole(?) ~ -legoi'** 「個 [49]」、**-u(?) ~ -kago'** 「つ [53]」

これらは、他の類別詞による言い換えが可能であり、そのことが「一般的」であることの証左となる。**-lu**「本 (太い)」は、*koiwala*「キャッサバ」等に使うが、*nalu*「一本」を、さらに限定的な *nawile'*「一芋」で言い換えることができる。**-bole(?) ~ -legoi'**「個」は、§ 2.2 の表 4 に挙げたように、計数一般に使われることに加え、*sapaia'*「薩摩芋」などの *nabole'*「一個」を *nawile'*「一芋」で言い換えることもできる。

-u(?) ~ -kago' 「つ」は、広く名詞一般に使うことができ、例えば *nau'* 「一夜」だけでなく、*nalo* 「一夜」による言い換えが可能である。

(35c) の特定のな類別詞には (38) に挙げるものがある。

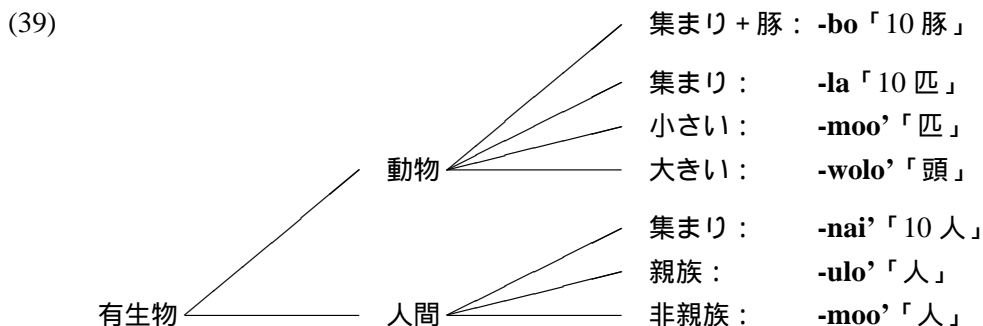
(38) -ma「房(バナナ) [3]」、-we「歯 [5]」、-wili(?)「筋(川) [11]」、-male(?)「年 [13]」、-wiaa(?)「実(バナナ) [19]」、-lusi「歌 [20]」、-mago「腿 [21]」、-miku「10 キナ [22]」、-watei「回 [24]」、-wiku「筋(道) [25]」、-naasi(?)「庭 [33]」、-wagu(?)「弓 [34]」、-leuku「穴 [38]」、-noowe ~ -loowe「枝 [39]」、-welaa(?) ~ wegila「月 [43]」、-(weka')nawe' ~ -we'「岳 [25]」、-long(?)「耳 [56]」、-luta「目 [59]」

ただし、-we「歯」は、*kaliwe*「歯(全部)」と *kawe*「歯(一本)」に使う「歯」のための類別詞である。同じく、-leuku「穴」も、*leuku*「穴」と *kuula*「穴」、つまり「穴」という概念のために使う。

以上、(35) の3つの観点から類別詞を分類したが、以下では個別の意味に基づいて分類する。有生物 vs. 無生物で大きく分け、それぞれの下位分類をおこなう。類別詞の代表形として、数語幹「1」と共起する形式を挙げることにする。

■ 有生物

有生物は、人間と動物に分かれる。人間の場合は、さらにその下位分類に、集団性と親族性、動物の場合は集団性とサイズの大小が関わる。



豚は、単体では -wolo(?) 「頭」の類別詞を使うが、10匹単位の場合は豚に特別の -bo 「10豚」を用いる。また、人間の「親族」「非親族」の区別は、(24) や [51], [54] で見たように、単数と双数に限られる。(39) の分類は、図5のように、意味成分に基づいたベン図であらわすことができる。

■ 無生物

有生物に対し、無生物は、(i) 一般、(ii) 身体、(iii) 自然、(iv) 人工物、(v) 単位、(vi) 植物、(vii) 形などに分けることができる。

1つ目の「一般」の類別詞は、(37) で取り上げた -u(?) ~ -kago' 「つ」である。[53] に列挙した通り、さまざまな概念に対して使われる。

「身体」と「自然」の類別詞をそれぞれ (40) と (41) に挙げる。

(40) 身体：-mago「腿」、-long「耳」、-luta「目」、-we「歯」

(41) 自然：-lubo「滴」、-wili「筋(川)」、-wiku「筋(道)」、-mesi「土」、-miilu「深み」、-mui「泥」、-wola「森」、-leuku「穴」、-nawe「岳」、-welo「側(岸)」

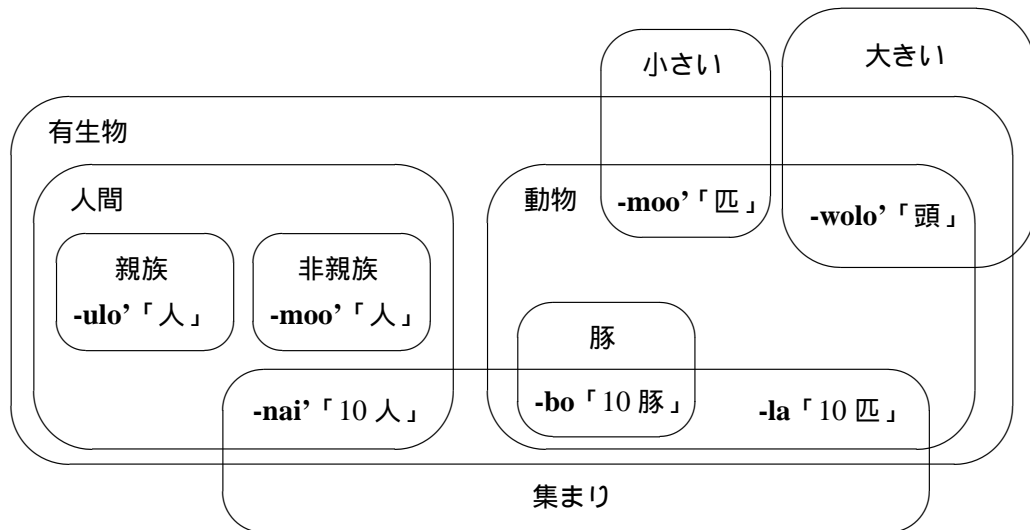


図5 有生物の類別詞の意味地図

「人工物」は、さらに無形と有形に分けられる。無形のものとして **-lusi**「歌」がある。有形のものとしては (42) に挙げるものが該当する。

(42) 人工物：有形；

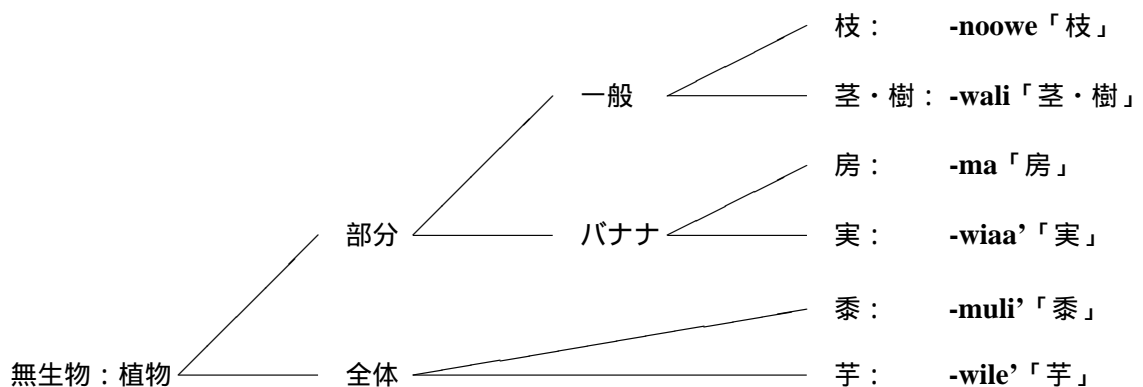
乗物の **-wisi**「軒・艘・台」、家具の **-me**「台」、食器の **-mage**「膳」、食器の **-wege**「器」、入れ物の **-liau**「袋」、衣服の **-ne**「着」、首飾の **-lii**「飾」、首飾+集まりの **-mono**「10 飾」、道具の **-mai**「丁」、武器の **-wagu**「弓」、金銭+集まりの **-miku**「10 キナ」、囲いの **-wuubu**「張^{はり}」、区画の **-meesi**「区」、庭の **-naasi**「庭」

「単位」は、日数の **-lo**「日・夜」、月数 **-wela**「月」、年数 **-male**「年」、回数 **-walo**「回」がある。

■ 無生物：植物

「植物」の中には、植物それ自体をあらわすものと、植物の部分をあらわすものがある。部分をあらわす類別詞には2種類あり、「バナナ」の部分のみを類別する特定のなものと、「植物一般」の部分を類別する一般的なものに分けられる。

(43)



■ 無生物：形

「形」に関する類別詞は、意味的に最も入り組んでいる。一次元的に拡張する「長さ」と、二・三次元的に拡張する諸特徴に大きく分けることができる。さらに大きさ・太さなどで細かく分けられる。相互に作用する各特徴を表 6 にベン図によってしめす。

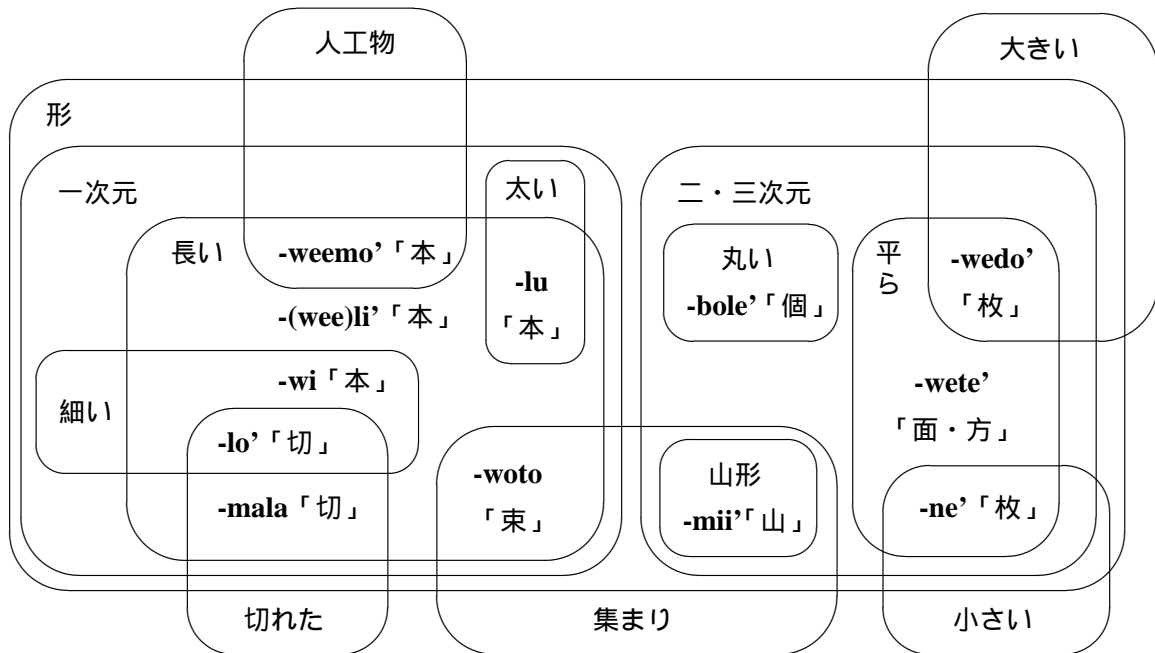


図 6 形の類別詞の意味地図

意味的に最も単純なのは、一次元の **-(wee)li'**「本」と、二・三次元の **-bole'**「個」および **-wete'**「面・方」である。これら以外の類別詞は、必ず二つ以上の意味成分と関連付けられており、それぞれが概念の詳細な類別に使われることがわかる。特に複雑なのは、**-lo'**「切」であり、[長い][細い][切れた]の3つの意味成分が関わる。§ 3 の [12] にも挙げたように、「バナナの皮、縄の一種」「豚の(頭から尾に向かって長く細く切った)切り身」など、文化的に特殊なものを類別する。

また、[集まり][大きい][小さい]は、有生物の図 5，人工物：有形の (42)，形の図 6 の意味分野に通じて見られ、実用性の高い意味成分だと言える。

6 まとめ

ナゴヴィシ・シベ語は、Aikhenvald (2000) の言語類型論の枠組みから見た場合、「形容詞」「助数詞」「所有」「直示」という、少なくとも 4 つの形態統語的環境で類別詞を使う「多重類別型言語」である。先行研究において、同じブーゲンヴィル諸語のナーシオイ語、モトゥナ語は、多重類別をおこなう、類型論的に稀なタイプの言語とみなされているが、本論文ではナゴヴィシ・シベ語もこのタイプの言語であることを明らかにした。ナーシオイ語、モトゥナ語では、さらに動詞にも類別詞が使われるが、ナゴヴィシ・シベ語でも同様かどうか、現段階では明らかではなく、さらなる調査と検証が必要である。

本論文では、助数詞として使われる際の形態論的特徴と、計数の形式的特性に依拠して、ナゴヴィシ・シベ語の 59 種類の類別詞を、5 つのタイプに分けて分類し、[1]-[59] の通し番号をつけた。その中で、文法的数の区別、異形態の種類という形態論的特徴と、序数の形式を使うか、「3」以上をあらわす形式が

存在するかという計数の形式的特性を議論した。今後の調査から、新たな類別詞が見つかる可能性もあるため、本論文で提示したリストには暫定的に番号付けをおこなっていることに留意されたい。

類別詞の分類に用いた文法的数の区別には、単数 / 双数 / 複数のパターンと、単数 / 非単数のパターンがある。本論文では、文法的数の標識の異形態のほとんどが、類別詞の声門閉鎖音の有無、モーラ数、母音・子音の音色に条件付けられている、すなわち音韻論的に条件付けられた異形態であることを明らかにした。加えて、いくつかの標識に類推や形態論的要因が関わっていることも議論した。

また、類別詞の意味的な分類として、文化的類別詞、一般的類別詞、特定の類別詞を分けた。次に、より個別の意味によって、有生物と無生物に分け、無生物を (i) 一般、(ii) 身体、(iii) 自然、(iv) 人工物、(v) 単位、(vi) 植物、(vii) 形に下位分類することで、類別詞の意味的な分類を試みた。その結果、類別詞に反映されている、ナゴヴィシの文化と言語との関わりが明らかになった。動物では豚が、植物ではバナナが、形では長さ、丸さ、平たさなどが重要であるという点、人間、動物、価値交換媒体 (貝貨、キナ) が、10 の数をひとまとめに扱うという点、モノの「大きさ」や「集まり」が広く類別に関わっている点などは、ナゴヴィシ・シベ語の言語・文化に根ざした固有の事実である。

南ブーゲンヴィル諸語の記述および歴史言語学的分析は、現在、発展途上にある (cf. Evans 2010)。ナーシオイ語、モトゥナ語、ブイン語の記述は進んでいるが、ナゴヴィシ・シベ語の記述はほとんどなされていない。本論文で扱った類別詞は、南ブーゲンヴィル諸語の比較において、語彙と同様に有用だと思われる。「多重類型型言語」である南ブーゲンヴィル諸語の史的考察については、今後の課題としたい。

参考文献

- AIKHENVALD, ALEXANDRA Y. (2000) *Classifiers: A Typology of Noun Categorization Devices*. Oxford Studies in Typology and Linguistic Theory. Oxford: Oxford University Press.
- (2006) Classifiers and noun classes: Semantics. In *Encyclopedia of Language & Linguistics*, ed. by Keith Brown, volume 2, 463–471. Amsterdam: Elsevier, 2nd edition.
- ALLAN, KEITH (1977) Classifiers. *Language* 53 (2). 285–311.
- ALLEN, JERRY, & CONRAD HURD (1965) *Languages of the Bougainville District*. Port Moresby: Department of Information and Extension Services.
- DIXON, R.M.W. (1986) Noun classes and noun classification in typological perspective. In *Noun Classes and Categorization: Proceedings of a Symposium on Categorization and Noun Classification, Eugene, Oregon, October 1983*, ed. by Cloette Craig, volume 7 of *Typological Studies in Language (TSL)*, 105–112. Amsterdam: John Benjamins.
- EVANS, BETHWYN (2010) Beyond pronouns: Further evidence for South Bougainville. In *Discovering History through Language: Papers in honour of Malcolm Ross*, ed. by Bethwyn Evans, volume 605 of *Pacific Linguistics*, chapter 3. Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- GIL, DAVID (2005) Numeral classifiers. In *The World Atlas of Language Structures*, ed. by Martin Haspelmath, Matthew S. Dryer, David Gil, & Bernard Comrie, chapter 55, 226–229. Oxford: Oxford University Press.
- GRINEVALD, COLETTE (2000) A morphosyntactic typology of classifiers. In *Systems of Nominal Classification*, ed. by Gunter Senft, volume 4 of *Language, culture and cognition*, chapter 2, 50–92. Cambridge: Cambridge University Press.

- (2004) Classifiers. In *Morphologie: Ein Handbuch zur Flexion und Wortbildung*, ed. by Geert Booij, Christian Lehmann, Joachim Mugdan, & Stavros Skopeteas, volume 17.2 of *Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft (HSK)*, chapter 97, 1016–1031. Berlin: Walter de Gruyter.
- HURD, CONRAD (1977) Nasioi projectives. *Oceanic Linguistics* 16 (2). 111–178.
- , & PHYLLIS L. HURD (1966) *Nasioi Language Course*. Port Moresby: Department of Information and Extension Services.
- LAYCOCK, DONALD C. (2003) *A Dictionary of Buin: A Language of Bougainville (edited by Masayuki Onishi)*. Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- LEWIS, M. PAUL (ed.) (2009) *Ethnologue: Languages of the World*. Dallas, Tex.: SIL International. Online version [Accessed 29 December 2009]: <http://www.ethnologue.com/>, 16th edition.
- OFFICE, N. S (2002) *Census Unit Register: North Solomons Province*. Port Moresby: National Statistical Province.
- OLIVER, DOUGLAS L. (1955) *A Solomon Island society: Kinship and leadership among the Siuai of Bougainville*. Cambridge: Harvard University Press.
- (1973) *Bougainville: A personal history*. Victoria: Melbourne University Press.
- (1991) *Black Islanders: A personal perspective of Bougainville, 1937–1991*. Melbourne: Hyland House.
- ONISHI, MASAYUKI (1995) *A Grammar of Motuna (Bougainville, Papua New Guinea)*. Australian National University dissertation.
- (2004) Instrumental subjects in Motuna. In *Non-nominative Subjects*, ed. by Peri Bhaskararao & Venkata Subbarao, volume 2 of *Typological Studies in Language (TSL)*, chapter 4, 83–101. Amsterdam: John Benjamins.
- 稲垣和也 (2009) 「ナゴヴィシ・シベ語における類別辞の形態統語法と意味論」(口頭発表). 総合地球環境学研究所, 9月30日, 京都.
- 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典: 術語編』, 第6巻. 東京: 三省堂.